

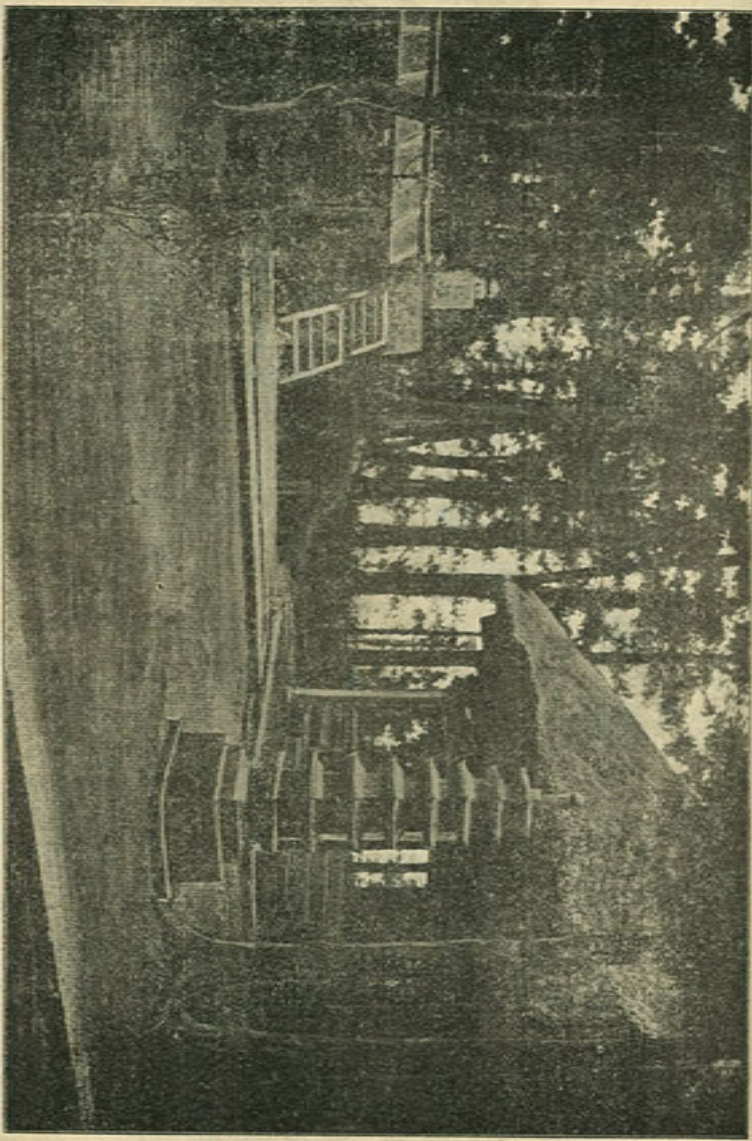


村雲尼公猷下御題字

日蓮宗管長 旭日 苗猷下題字  
 顯本法華宗管長 本多日 生猷下序文  
 海軍大將 上村彦之丞閣下題字  
 田中智學先生序文 文學士 國友日斌先生謹輯

日蓮上人自叙傳

全一冊  
 ▲洋裝頗美本◎新式ポイント活字◎紙數五百余頁◎特製總皮  
 三方金正價壹圓廿錢◎上製天金正價七拾五錢◎郵稅各八錢  
 英雄僧日蓮上人の自傳なり、法華宗信徒は固より  
 其教義を研究せらるゝ諸氏の愛讀を祈る  
 ●御曼陀羅 御自筆佐渡國阿佛坊妙宣寺に藏する靈寶をコロタ  
 ●附錄 イブ版白刷とし禮拜掛軸用として巻頭に添へあり  
 法華經勸持品、如來神力品、如說修行抄、年表



東地成堂三原屋敷在

勉強堂一統書店

東京 東區 芝浦 口 替  
 市 東區 芝浦 口 替  
 神 東區 芝浦 口 替  
 田 東區 芝浦 口 替  
 區 東區 芝浦 口 替  
 錦 東區 芝浦 口 替  
 町 東區 芝浦 口 替  
 六 東區 芝浦 口 替  
 〇 東區 芝浦 口 替  
 丁 東區 芝浦 口 替  
 目 東區 芝浦 口 替

發賣元 取次販賣



# 佐渡塚原の靈地

千古の偉聖日蓮上人、房州小松原の劍難、伊豆伊東の流難、鎌倉龍ノ口の刃難、草庵松葉ヶ谷の火難、一難既に去て一難また來る。

## ▲着島の旅程

實に我皇紀一千九百三十一年、涅槃の雲拘尸那城の薨を掩ひ、湛寂の風沙羅雙樹の枝を拂ふてより、二千二百二十年に當る。

今月十日起、相州愛宕郡依智郷一付、武藏國久目河宿。經、二十一日、付、越後寺泊津。自此渡、大海、欲、至、佐渡國。順風不定、不知、其期。道間事心莫、及、又不、及、筆、(繪、蓮、文、六、九、七、寺、泊、御、書)

同十月十日に依智を立つて同十月二十八日に佐渡の

國へ着きぬ(繪、蓮、文、一、三、九、八、種々御書)

## ▲金剛の信念

佛になる道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ佛にはなり候らめとをしはからる。既に經文の如く惡口罵詈刀杖瓦礫數々見擲出と説れてかゝるめに値候こそ。法華經をよむにて候らめといよいよ信心もをこり後生もたのもしく候(繪、蓮、文、七、〇、一、佐渡御書抄)

命有、限、不、可、惜、途、可、願、者、佛、國、也(繪、蓮、文、七、〇、三、富木入道御返事)

## ▲塚原三昧堂の光景

當年の塚原三昧堂、四顧茫茫、寒草徒らに亂れ、陰風地を捲いて冷氣骨を透し、北海の怒濤雲を起して金北山の荒嵐、肌爲に裂く、臥して破るものは破れたる一

一枚の糞也、握つて食ふものは北天の白雪也、たゞ訪ふ一痕の残月と北海の濤聲あるのみ、慘又慘を極む

十一月一日に六郎左衛門が家のうしろみの家より塚原と申す山野の中に。洛陽の蓮臺野のやうに死人を捨つる所に一間四面なる堂の佛もなし。上は板間あはず四壁はあばらに雪ふりつもりて消ゆる事なし。かゝる所に敷皮打ちしき糞うちさて夜をあかし日にくらす。夜は雪電雷電ひさなし晝は日の光もささせ給はず心細かるべきすまひなり。彼李陵が胡國に入りてがんかうくつにせめられし。法道三蔵の徽宗皇帝にせめられて面にかなやさをさされて。江南にはなたれしも只今とあほゆ(縮造文一三九八)鎌倉を出しより日に強盛かさなるが如し。ありとある人は念佛の持者也。野を行き山を行くにもそばひらの草木の風に随てそよめく聲も。かたさの我を責むるかとおぼゆ。やうやく國にも付きぬ。北國の習なれば冬は殊に風はげしく雪ふかし衣薄く食ともし、根を移されし様自然にからたちとなりけるも身の上につみしられたり。栖にはあはなかるかや

法悦の生活

いたづらにくちん身を法華經の御故に捨てまいらせん事あた石に金をかふるにあらずや(縮造文七〇一)當時の責はたうべくもなければとも未來の惡道を脱すらんとをもえば悦ぶなり(縮造文七七四)當世日本國に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華經にたてまつる名をば後代に留むべし(縮造文八二)我並に我弟子諸難ありとも疑ふ心なくば自然に佛界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ現世の安穩ならざる事をなげかさざれ乃至法華經の信心をやぶらずして靈山にまいりて返て導けかし(縮造文八二〇)日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず。後生には大樂をうくべければ大に悦ばし(縮造文八二四)師子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし。例せば日蓮が如し(縮造文八二八)文永八年十一月より同九年四月に至る半歳。塚原三味堂に在り、身に随ふものは立像の釋迦と一卷の法華經あるのみ、護法の熱深思國の忠誠、凝て以て天地神明

ひしげれる野中の三味ばらに。ちちやぶれたる草堂の上は雨もり壁は風もたまらぬ傍に、晝夜耳に聞く者は枕にさゆる風の音、朝に眼に迷る者は遠近の路を埋む雪也。現身に餓鬼道を経寒地獄に墮ちぬ、彼蘇武が十九年之間胡國に留められて雪を食し。李陵が嚴窟に入て六年糞をきてすごしけるも我身の上なり(縮造文二一六八)

此比は十一月の下旬なれば相州鎌倉に候し時の思に四節の轉變は萬國皆同じかるべしと存候し處に。此北國佐渡の國に下着候て後。二月は寒風類に吹て霜雪更に降らざる時はあらざれども日の光をば見ることなし(縮造文七〇二)佐渡の國にありし時は里より遙かにへだたれる野と山との中間に塚原と申す御三味所あり。彼處に一間四面の堂あり。そらはいたまあはず四壁はやぶれたる雨はそとの如し雪は内に積る。佛はおはせず蓮臺は一枚もなし。然れども我根本より持ちまいらせて候教主釋尊を立ちまいらせ。法華經を手ににぎり糞をさ笠をさして居たりしかども人もみへず食もあたへずして四箇年なり。彼蘇武が胡國にとめられて十九年が間糞をさ雪を食としたるが如し(縮造文一七八〇)

に通ふ、時に能く一人の爲にも法を説いて説ゆ、朝に法雨に潤いて喜び夕べに講筵に侍して樂しむ信行者多く、阿佛坊夫妻中興入道本間氏等即ち其人也、あゝ法華色讀の壯觀、勤持二十行の聖識、是れ上人當身の大事にして本化上行の自覺愈々固く、久遠の靈光燦然として渾宇に輝く、顯本無限の活生命、こゝに發して雄大なる開目抄成る、本抄は各般の大問題を活釋判定して其歸向を明示す、蓋し人生の範則通規にして吾人の精氣の宿る所也、虔て之を上人に聽かむ去年の十一月より勘へたる開目抄と申文二卷造りたり。頸切らるゝならば日蓮が不思議とめんと思て勸たり。此文の心は日蓮によりて日本國の有無はあけるべし。譬へば宅に柱なければたまたず。人に魂なければ死人也。日蓮は日本の人の魂也(縮造文一四〇〇)あゝ佛陀の大精神を展べて吾人の魂を發揮し、堂々として活ける説明を與へたる開目抄述作の地、佐渡塚原三味堂、いかに無限の教訓を存する靈地にあらざるや(即ち當年佐渡靈蹟を巡拜し、感無量、こゝに塚原の聲を掲げて、(三)上に庄嚴)



## 儒教と佛教

大僧正本 多 日 生

儒教と佛教とは特種の關係がある、我國の儒教が其發達の歴史を振返つて考ふると、是は皆佛教徒の手に依つて成されたものでありました、最初儒教が渡りましたけれども、佛教渡來以前の儒教と云ふものは見るべき事柄がありませぬ、佛教が渡つて佛教研究の傍らに僧侶が儒教を取調べ、之を國民に紹介したと云ふのが日本に於ける儒教の歴史であります、それでありますから儒教が我國に普及したのは佛教徒の手に依つて成されて居る、佛教徒の手に依つて成されたから儒教が日本化して來て居る、儒教が一時衰頽を致しました平安朝時代などに之を維持して參つた、鎌倉時代に維持して參つた、室町時代に維持して參つたと云ふものは皆

佛教徒であります、儒者と云ふものは特別にありませぬ、皆僧侶が兼學を致したものである、そこで儒教が日本化致しまする場合のことを考へましても、又儒教の色々な學派の主張と云ふものを考へましても、根本の儒教の性質を考へましても、其所に佛教と云ふものは多大の關係を取つて、さうして共に日本文明の爲に力を致したのであります、儒教が日本化した事柄等を申して見ますならば、主なる點は即ち忠孝の道徳であります、支那の儒教としましては、忠と云ふことは心のまことと云ふ意味であつたが、日本に來ては其まことの心を君に捧げる、父母に捧げると云ふことになつて、更に進んで此忠孝の觀念が唯忠主義と言

ひますか忠孝一本主義と云ふことになりて、何所までも御皇室を中心として、忠義の爲に親に孝行する忠義の爲に兄弟仲好くすると云ふやうな工合に、忠を本位として一切の道徳は發展するものであると云ふことであつたのであります、さて此事が如何にして成されたかと申すと、無論是は日本の御皇室の御威徳の爲に導かれて儒教が日本化して參るには違ひありませぬけれども、其發現しませる順序を考へますと、爰に面白いことがあります、大體儒教を盛んにしました人を考へると、聖徳太子、和氣清麿、菅原道真、或は親房卿、或は光圀卿と云ふやうな人が餘程貢獻が多いのでありましたが之等の人は皆佛教と併せて以て進んで來たので、殊に道真卿の如きは佛教信者である、國體擁護者であつて儒教を併せて用ひられた、斯くして次第に日本化したのであります、完全に日本化して來たのは光圀卿あたりの所からである、徳川の初めでも藤原惺窩先生伊藤仁齋先生あたりの所では、未だ問題が其所へは進んで居りませぬが、光圀卿が其ことを考

へられた其動機は何所に在るかと言ふと、史記の伯夷叔齊傳を讀まれたことに依つて、此支那の儒教が日本の唯忠主義の道徳に變つて來るのであります、是れ固より日本の建國の御靈威に依るのでありますけれども、實際に民間に日本化したしました動機と云ふものは、光圀卿の伯夷叔齊傳を讀んで感奮したことにありますのであります、其ことは弘道館の記にも書いてあります、伯夷叔齊を略して夷齊と書いてありますが、「感奮夷齊に發す」と云ふことがある、光圀卿が伯夷叔齊傳を讀んで感奮して、其精神から移つて大日本史を作る考へなられたと云ふこととあります、大日本史の序文でありますか、大日本史を徳川の方へ獻じたときでありますしたか、其中にも明かに伯夷叔齊傳に感奮して大日本史を編纂することに相成つたと云ふことが書いてある此のことがどう云ふ問題であつてそれが日本の道徳に變化して來るかと言ふと、彼の周の武王が殷の紂王を討つた、それは宜しくないと云ふので伯夷叔齊は馬を叩いて諫めた、けれども太公望が之を造つてさうして

遂に周の武王は師を起して行つた、それで伯夷叔齊は汚れたる國の粟は食はぬと云つて、西山に隱遁をしまして藪を食つて遂に終つたのであります、さうして西山の歌を作つて暴を以て暴に易ふ其なるを知らず、即ち殷の紂王も無道であるけれども、武王が臣下の身を以て之を討つは暴逆である暴奪であると云つて政道の頽廢を嘆いて死んだ、それが非常な問題です、周室を立てやうとして居る孔子が武王のことを考へるとさう云ふことがある、それだから論語の中にも「武王は善を盡さず」と云ふて居る、どうも武王は傷かないとは言へぬと云ふことを言ふてある、それが問題になつて、孟子の時代に孟子は武王の方を辯護して、匹夫の紂を誅するを聞くと云つて紂は何も王様でない、徳を失ふたから匹夫であると言ふて居るけれども、一方には伯夷叔齊の徳を褒めて、伯夷叔齊の風を聞く者は頑夫も廉潔の士になるし、腰拔の武士も立つことあるべしと云つて感奮して之を獎勵して居る、けれども問題が解決がつかぬ、どうも武王が悪いとか伯夷叔齊が

悪いとか云ふやうな都合で問題が残つて居つたのを司馬遷が史記を書く時分に世家列傳の劈頭に伯夷叔齊傳を書いて、周公よりも微子よりも其他の偉人よりも偉い所に伯夷叔齊を置いた、それを光圀卿が見られて感奮せられたので、大義名分の論は此所だ、それを鑑みて日本の御國體を稽へると、日本の中世に於ては不法惡逆なことがある、之を明かにしなければならぬと云ふので大日本史を書くことに相成つたと云ふのであります、是は光圀卿に限らない、苟も國士である以上には、伯夷叔齊の問題に感じない人はないと云ふ位のことである、私の見た所でも、彼の古河の城主であつた堀田正俊と云ふ人の巖言録と云ふ書にも此問題が大に論じてある、時の將軍にまで此問題を出して、どうてもし伯夷叔齊の方が善い、周の武王の方が悪いと云ふことを申した、所が其當時の將軍が感奮して善いか悪いかが分らぬけれども、御身の考へは忠節の論だと云ふて非常に感奮せられた、其ことを喜んで古河の城主堀田正俊が書いた、又山崎闇斎先

生の垂加文集などにも武湯革命論と云ふ題で盛んに此問題を論じて居る、凡そ我國に於て儒教と御國體のこととを考へるものは、一度は伯夷叔齊の問題に觸れて居るものであつた、國の基と題した本で維貞と云ふ人の本ですが、それは何が書いてあるかと云ふとこの問題である、即ち伯夷叔齊の如きは儒教の精華である、孔子は春秋を書いた、其精神と云ふものが乱臣賊子を許さぬ精神である、孔子が日本に出たならば日本の御國體を教誡したであらう、維貞と云ふ人に依つて説明されて居る其内容は、支那の忠臣で文天祥にしる顔真卿にしる皆えらいけれども、是は皆伯夷叔齊の風を望んで出たものであるから、其功は夷齊にあると云ふことを論じて居るのである、思想の影響と云ふものは恐ろしいもので、日本の志士も伯夷叔齊の風に感奮して起つたものが多い、唯だ藪を食つて首陽山で死んだと云ふやうな昔噺みたやうなものであるけれども、それが主となつて儒教を日本化するものが出来た、非常に面白いことだと思つて居ります、私は其ことに就て

別に日蓮上人の爲に考へたのではなかつたけれども儒教が日本化すると云ふことの意義と云ふものは、伯夷叔齊の問題から皆が八ヶ間敷言ふて居るので、日蓮上人のことを想ひ起すと、伯夷叔齊のことに就ては議論どころでない、身延山へ隱遁せられたと云ふことは之を實行せられたのであつた、日蓮上人は三度諫めて退くは古への道であつて、この三度諫めて退くの本文は本より存じの旨なりと云ふことを書いて居られるが、此古への道と云ふ本文と云ふことは何から來て居るかと申しますと、是は即ち伯夷叔齊の事である、問ふまでもなく三度諫めて退くは古への道なりと云ふことは、即ち太公望は武王を輔けて忠だと思つたけれどもそれは大義名分に背いて居る、本當に大義名分に明るい者は諫めて用ゐられぬれば身退くのであると云ふので、斯う云ふ事を書いて居られるのであります、之を文章に書いた計りでない、之を實行して身延山へ這入つたのであるからして、丁度首陽山に伯夷叔齊が隠れてさうして天下政道の頽廢を嘆いたと同じやうに

日蓮上人は身延へ隱遁して立正安國の實現せらるゝのを祈つて生涯を御送りになつた、伯夷叔齊は身を以て教を立て、千萬世の下忠臣義士を輩出せしむると云ふことを紀維貞も書かれて居りますが、日蓮上人は身を以て教を立て、千萬世をして日本の大義名分を知らしめると云ふことに成つて居るのである、其處から考へると日蓮上人が古への道なり本文なりと云つて實行した所の身延隱遁の事柄と云ふものは伯夷叔齊のことを實行して居る、彼の光圀郷なども伯夷叔齊傳を讀んで感奮して大日本史を御書きになつたと云ふので、思想の感奮と云ふものは不思議のものである、其所に儒教の日本化と云ふものは佛教徒の日蓮に依つて先鞭を着けられて居ると云ふ偉大なる事實を見るのである、後から廻つて、忠孝論國家主義が盛んに來たから其真似をしてやり出すと云ふのでない、光圀郷あたりが考へられるよりは三百年も前に日蓮上人は早くも其ことを考へて身を以て實行して居られる、どうも支那の道徳では孝經などを見ても、至徳樂道と云ふものは唯親に孝

と云ふことになつて居る、忠孝の二道は大切であつても、忠も亦孝の家より出づと言つて孝が重くなつて居る、それを日本に於ては孝よりは忠が大切であると云ふことに變つて來て居ると云ふことに就ては、色々な事情もあり學者の力もありますけれども、是亦日蓮上人が最も能く其事を示された、平重盛郷などは其事に就て色々迷はれて忠孝兩全ならずと云つて熊野に參詣し憤死せられたと云ふ事であるけれども、日蓮上人は重盛郷などの事に就ても御考へになつた事と思ひますが、開目抄の中に引かれ、又兄弟抄の中に言つて居ることを見ると、孝子は父が謀叛でもする場合には玉様に力を貸して父を討つと云ふ事が本當の孝行であると明言してある、それであるから忠孝の關係を解決したことも餘程早くから着想せられて居る、併しながら孝道を輕んじて居るのでないからして、一方には生海苦を見て泣いた、身延に隱遁せられて居る時に海苔を貰つて、之は子供の時分に能く親から食はして貰つたもので、生涯苦は色も變らぬけれども父母は在せぬと

云つて、六十近いおぢいさんになつて海苔を貰つて泣いた、玉子は舜は大孝なる者なり五十にして父母を思ふと言つたけれども、日蓮上人は六十にして父母を思はれた、雀が子に何か食はして居るのを見ても、猫が兒に乳を飲まして居るのを見ても、空飛ぶ鳥、地を走る獸に至るまで慈愛を以て自分の食ふべき物を兒に與へて居る、動物ですら親は子を愛する、我が父母はそれよりより多き愛を以て我れを育しみ下さつたのかと思ひば、魂も消える計りに思ふと云ふ事を言つて居られる、實に孝心の深かつたことは明かであります、多くの儒者は佛教徒と云ふと忠の心も無く孝の心も無いものであるとして、忠孝倫理の道を破却するとの非難を千篇一律繰返すのであるが、親孝行の坊さんは澤山ある、元政上人の如きはどうか、小栗栖に御座つて山崎と云ふ所の高峯と云ふ檀林に行つて教へて居るどの位里數があるか知らぬが、昔の事だからちよつと歸ることは出來ないから、一晚學校へ泊つてもう二晩目には親の事が氣にかゝつて寐られぬと書いてある、

實に親孝行と云つても儼いものぢやと思ひますが、さう云ふ譯でありまして佛教徒は親孝行の心が無いと云ふことは言へない、元政上人が釋氏二十四孝と云ふものを書いて居るが、世間で謂ふ二十四孝よりももつとえらいものがある、斯の如く忠孝の問題が解決してあるのみならず、親に對する孝はちやんと守りて居る、支那の儒教はどうも理論的であるけれども我日本に於ては活動的になつて居る、彼の陽明學の熊澤蕃山の如く、經倫を直ちに行ふと云ふやうになつて、腐れ儒者を攻撃してさうして實行的に移つて來た點に於て、日本の儒教は特色があるのであります、是は佛教に於ても精進活動と云ふことを嚴しく獎勵して居る、即ち日本の高僧の中でも日蓮上人などを見れば活動と云ふ事は實に盛んであつた、又佛教の威化を受け奮進した人々は、内面に佛教の威化が力を添へて居るに相違ない、佛教を信じたから仕事をやらうと思つた者が、やらぬと言つて魔胡付いて居るのは、厭世悲觀の宗教家でありまして學び損うたる佛教徒でありま

す、本當の佛教徒はそんなことはありませぬ、今日にしても獨善主義の佛教厭世主義の佛教を行つて居るものもありませぬけれども、それは遅れたることと間違つたることとあります、又儒教の學派は澤山分れて居るけれども、主なるものは朱子學、徂徠學、陽明學と云ふものであるか、其朱子學の主張する所の説は佛教の影響を受けて起つたものである、徂徠學は孔子の言はれた言葉に基いて倫理的政を行ふと云ふこと、徳教を行はんとしたのであるが、徂徠先生の道德上の考と云ふものは少しも佛教と衝突する點はない、孔子が論語に言はれて居ることをやつて行くと云ふやうな事柄は寧ろ朱子が儒教の中で色々な理屈を捏造して深遠なる哲學宗教を誣るやうな思想よりは餘程宜い、又陽明學に於て實行と云ふことを尊んで六經は我が註脚なり、我六經を註するにあらずして六經我を註す、何ぞ我れ書物を註釋するの必要あらん書物は自分を説明して居る所のものである、本質は自己である六經は我が註脚なりと云ふことを主張したのは陽明學派であります

所の義と云ふものを調和して、仁義と云ふものを巧妙に應用した所に儒教の長所があるのである、所が博愛の精神の方向を誤ると、獨善主義になつて仕舞ふから或は仁に背き或は義に背き、廣いことぢやと云ふと義を忘れて居るし、小さいことぢやと仁を忘れて終ふ、個人の解放を主張し惡平等を主張する、個人の解放は仁に背き惡平等は義に背く、彼は人倫綱常の道に背くと云つて攻撃をされる、佛教の中に仁義に背くと云ふことは何處にあるか、如來の大慈大悲と云ふものは仁愛と云ふことと違はない、寧ろ比較して見ると廣い、義と云ふことに何處か觸れるか、佛教は四恩と云ふものを説き其宜しきに從つて義を全うして行くと云ふことがある、又法を國王大臣に附屬して居られる所より考へても、決して國家の組織を無視し國家を超越して博愛の精神を行ふと云ふが如き迂遠なものでない、殊に日蓮上人に就て見れば一切衆生を愍み給ふ慈悲である「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず日蓮は泣かねども涙かはくひさなし」と言ふて居る、儒者は仁を説くもの

斯う云ふことは佛教の方には盛んに云ふので、王陽明は佛教に接觸した爲に斯う云ふことを言ふのだらうと思ふ、徳川時代の學者は佛教を敵視するけれども、佛教の手が着いたらもつと良くなつたらうと思ふ、徂徠が孔子の言ふことを大切にすると云ふことも、倫理を尊重したのであつて惡いことはない、陽明の六經は註脚なりと云ふことも惡いことはない、さうして唯だ佛教を敵として居るが、其所に佛教を學んだ人と交を結んでやつて居たならば、佛教は健全に發達し長所を發揮して來たことであらうと思ふのである、吾々から見て朱子學でも徂徠學でも陽明學でも佛教と衝突するやうな所は無いと思ひます、それから儒教本來の性質を考へると、是は即ち仁政を行ふと云ふことが主で、仁政は廣く天下を治めんとするもので、謂はゞ世界的人類全般の幸福を思ふて居るものであります、併しながら此博愛の精神も之を節する所の義と云ふものがなければならぬ、此廣い所の仁とそれから宜しきに適するやうに之を節して行く

である、博愛之を仁と謂ふとあるが、佐渡の雪中に居て自分の苦しみを忘れて如何にして一切衆生を救ふかと云ふことを考へて居られる、是だけの標本人物を徂徠先生なり仁齋先生でも、日蓮上人の精神を比較して見るならば大なる相違があると思ふ、義と云ふことに就ては多くの佛教徒かや損なつて居る點はあるが、日蓮上人は「我日本の柱とならん」と言つて居る、日本の大義名分を明かにする點に於ては、源平二家に對してさへ門番の犬二匹だと言つて居る、即ち「源平二家と申して王の門守の犬二匹候」とある、一沙門の身として、如何に源平二氏が蔓こつても天子様に對しては門番の犬ぢやと言ふ、實に大義名分の明白なるものだ、義を知つて居るとか知らぬとか言はれたものでない、是は實に大義を明かにする千古の格言である、再び得やうと思つても中々得られぬ、さう云ふ次第で日蓮上人の議論と云ふものは佛教内部に於ても義と云ふものを明かにして居る、孟子が君を無みし父を無みするは禽獸にあらざして何ぞと言つた、是は孟子の最も



氣類を擧げて居る所であるが、日蓮上人の遺文中には到る所に義を論じて居る、頼山陽なども日本外史を書いて論じて居るが、日蓮上人は最も明白に凜然として言つて居られる、又儒教の長所としては至誠と云ふこととて、至誠にして動ぜざる者は古より未だ曾て之れあらざるなりと云ふのは、吉田松陰先生が袂別の時に書かれた有名なものである、長州を出る時に野村子遠先生が死と云ふ一字を書いて之を授けられた、所が吉田先生が言ふのには、死ぬるなんと云ふことは何でも無い唯だ吾々は至誠あるのみ、死ぬの生きるのと云ふ問題でない、僕は斯かる餞別は貰ひたくないと言つて之を突返し、白い木綿に、至誠にして動ぜざる者は古より未だ曾て之れあらざるなり我れ學問而立にして未だ此意義を知らず、今度官に捕はれたに就て身を以て之を驗せんと書いた、江戸に行つて大義名分を説き王政維新の實を擧げなければならぬと確信して、江戸へ來て熱心に説いたけれども、どうしても動かない、とうとう小塚原に於て變刑になつて仕舞ふ、其最後の時に自

分の兄さんに上げられた絶筆の書がある、「學問非薄にして至誠天地を感格すること出來申さず以て今日に至り申候と云ふのが絶筆である、學問と云ふのは修養であります、修養が成くとも至誠と云ふことを信じて居るけれども、真心が天地を感動せしむるほどに修養が積んで居らぬものだから、徳川を説き伏せることが出來ない、天を怨みんや自分の修養の足りぬ所であると云つて嘆いて居られる、日蓮上人は何うである、日蓮上人の國を思ひ法を思ひ人を思ふことは非常なものでさうして彼の龍ノ口の刑場に出て、是程の喜びを笑へよかしと頭を法華經に捧げて金色の如來となると至誠の感動した時に、江の島の方から一條の大きな光が飛んで來る、三百人の團丸打つたる武者共は馬の上へづくまるもあり、大地に墮くもあり、近く寄れや〜と云へども寄る者なしとある、吉田松陰先生が見られたらどうであらう、それほど日蓮は天地を感格したがあゝ我は修養が足らぬと言はれるだらう、多くの儒者は日蓮上人の至誠天地を感動したことは、あれは迷信

だと斯う云ふやうなことを云ふ、それだから儒者は量見が狭い、我國の歴史で至誠にして動ぜざるものあらざると云ふ實例を見やうと思へば、佛教徒の中に多くある、至誠が儒者の專賣物ではありませぬ、量見狭く考へるから間違つて來る、

さう云ふやうな譯で、色々儒教の日本化した點、即ち忠孝主義活動主義と云ふことから考へても、或は朱子學徂徠學陽明學などの學說から考へても、或は儒教本來の特長から考へても、佛教は之を助け成してさうして儒教を日本化せしめ、儒教と共に力を協せて日本の文明を豊富にする所のもが佛教の本分である、佛教を敵とするは單に佛教を敵とするに上ららない、それが日本の文明の深遠なる方面、豊富なる生活を妨害する所のものである、それ故に儒教も佛教も其長所を助長し短所を矯正しつゝ進んで行くべきである、而して兩者の關係を見れば、儒教本來の長所を發揮して行くもの即ち佛教である、併しながら佛教に無い所を儒教に持つて居ることもあるから、互に長所を尊敬しつ

短所を掩ひ握手して進んで行くのが日本の文明を充全せしむる所以である、佛教徒であるから儒教が嫌ひだと云ふやうなことは全然宜しくない、さう云ふ工合に考へると、佛教は日本の國性に融合し儒教にも調節を取れて居る、それは佛教本來の性質が包容的であり又色々の方面に亘つて居るからである、それは佛教の原理は大體に於て不變と隨縁と云ふことを説明したもので、萬世不磨の大道を中心に置いて、それが三世に貫き十方に亘つて變らない、此道は何人でも之を尊敬せなければならぬ、さうして比不變の眞理は不變の儘にして活動して來て居るから、其縁に隨つて千變萬化極らない所のものである、故に善い所があれば之に贊し、惡い所があれば之を矯正する、即ち同化すると同時に又同化せしむる作用を持つて居る、中心には不變の眞理があり應用の上には敏活なる隨縁の作用がある、佛教とはかゝる廣大深遠なるものである、故に此の大道によりて世界の文明と人類の幸福を進めて行くことが大事であると思ひます

# 身退けは名進む

海軍少將 佐藤鐵太郎

外の講師の御方が皆様御差支の御様子で、とう／＼私が出ます様な事になりました、實は兩三日前三上夫人が御出てになり、二十二日の地明會には非出席する様に御申付けてありましたが、餘り突然で御辭退可申上言葉もありません、何の目的もなく御承諾申上げた様な次第でありますから、從て何等の御爲になる様な御話しも出来まいかと思ひますが、幸ひ關田僧正と三上師とより充分に色々御話しがありました後でありますから、そんなに興味がなくとも宜しからうと存じますので、もしツマラスと思召たら御聞き流しを願ふのであります

此前に御講演申上ました時も、矢張り暑い時でありまして、其節も色々御機嫌にかなはぬ事を申上られた様に

がもどうぞ昔の御婦人の如くにあらるゝ様に致したい、一時時代の要求から引込思致主義のしかも力のない消極的な御様子になつた様に見えたのは、本道の日本の御女性の本質ではない、如何にも控へ目にあらせらるゝ御様子の中に底深き處がなければならぬので、こゝにいふ風に御出てになる様に御願致しますといふ様な事も申上られた様に存じます、それからまた最後に、私が庭に出て寛を見ました感想を申上げて、日低ければ寛高しといふ事を申上げ、何んでも日が低ければ低い程寛が高くなる道理であります、御女性もまた其の通りで、御つむりが低ければ低い程御徳が高くなりますので、此點を御服膺になる様に申上られた様に記願致して居ります、これは獨り御女性のみならず、誰れても同様であります、稟質の充分になつて居ります樹木の枝は、必ずつむりが低くなり、充分に實のつた穂は必ず垂れますので、この邊の様子は中々薄つべらな西洋の婦人の道徳を以て較べることは出来ませぬ、西洋の道徳はどこ迄も夫婦が中心でありますので、子供

記願致して居ります、暑くて堪らぬので白地の着物を召して居られながら、目に立ち紫色の羽織を召された御嬢さまに途中に御目にかゝりました、あの暑いのに御羽織を召さるゝさへ如何と思ひますのに、蚊屋の様なものを御頸に巻たり何か致して居られるのは何の事でありましょうか、一向合點がまいらぬいふ様な事を申上げて大分御氣色に障つた様に記願致して居ります、それからまた日本國の御女性の立派な性格を備へて居らるる事は、神代の昔より變らぬので、決して消極的な陰鬱な悲觀的なものではなかつたので、如何にも凛とした處がありながら、其内に何ともいふ事の出來ない様な床しさを備へて居らるゝのは、本道の日本の御婦人の本質であられたのであるから、今の御婦人に對する場合でも日本人の想像の及ばぬ位であります、夫婦で子供を連れて散歩を致して居ります時なども、小供は多くチウにぶらさげられて歩調も何もありません、せい／＼いふて引張られて歩く様な次第で、夫婦はまた御互の御話しに夢中になつてどん／＼早足で歩くと云ふ様な鹽梅でありますので、到底日本では見ることの出來ない圖であります、日本でありましたら夫婦とも子供の歩くに連れ、悠然と歩いて小供をいたはつてやります、西洋ではこゝにいふ事は中々見られませんが、果してドツチがよいかは疑問であります、兎に角日本の方が同情に富んだ致し方で、この小さな事柄でも養性心を以て道徳の根本義と致して居るといふ事が分ります

此頃は何かといふ積りか、何でも箇ても新しい／＼といふて大騒ぎを致す事が流行りますが、新しいからといふて何もよいと申す譯のものではなからうと思はれます、私はどちらかと云へば、新しいものに「ロク」なものはないと思ふ位であります、譬へば人間の顔でも

千年も二千年も前から別段に變化がないのであります。改良に改良を加へモウ之より後に何も改良することは無いといふ事にならなければ、一定の形を存することは出来ないのて、毎日／＼變る様なものに「ロク」なものはありません、いつになつても變らぬといふのが大切で尊いので、新しいからといふて別に賞美するには及ばぬのであります、嘴の黄いろい學生が學校の先生の月旦をやるに、アノ先生はモウ古くていかんといふ様な事を兎角言ひたがるのであります、立派なものはいつになつても立派でありますので、古ひからとて賤すべきものではないからと思ひます、昔から變らぬのが尊いので、變るものは尊いものではないと併しどうも此頃は新しいものはやりてありまして、何でも箇でも新しくありさへすればよいものと思ふ様な薄ッペラな思想が一般に行はれて居りますので、新しい女といふ様な事をいふて、御自分で恐悦がつて居られる様な御方もあります、これなどは實際若々敷事であるといふは考へるのであります、時勢の變化がこう

り、また教育ある女を望む夫が多くなつたので、女子教育が盛になり、而かも本道の教育よりも寧ろ形骸上の教育が重なるものとなりましたので、男女の間に同一の學問が行はれると云ふ事になり、女の方では自然と男の様な資格を備へ、其精神までも男の様に、男の方では反て古來の男子たる性質を失ひ、段々と女の様になりつゝあるが如き鹽梅でありますので、自然の趨勢として御婦人方も深窓の内に床しく育てらるゝといふ事がなく、自然／＼と男女の差別がなくなる様になりつゝ居るのであらうと思はるゝのであります、御婦人方も相當に男の様な氣象を持って居らなければなりません、悪い處計り男の様になつては困るのであります、男の方がこういふことをするから、女も同様の事をやつても宜むといふて、あられないことを致す様な御婦人も大分ある様であります、女の方では男の悪いことを學び、男の方では女の悪いことをまねるやうでは、果してどういふ結果となるてありませうか、男の方がア云ふ悪い事をするが、女たるも

云ふ風になつたので、誰れの罪でもないかも知れませんが、ヨルク考へて見ますと無理もない事であり、先第一舊思想と致しましては、三從の教といふて、凡そ女と云ふものは、少いときには親に従ひ、嫁入りをしてからは夫に従ひ、年寄になつてからは見に従ふといふ風に、一生他の人から従ふて居らなければならぬといふ教でありますから、何となく如何にもツマラスといふ考へが出るのも無理はありません、新智識を得た御婦人の思想に動搖を來すのも無理はなからうと思ひます、其れに新舊物質的文明なるものが盛になりなつたので、萬事花やかになりなつたから、何うしても家にばかりクヌブツテ居るのが厭になつたり舊來の道德の權威が衰えたので、舊道德に對する敬虔の念がなくなつて、自個本位の精神が西洋から參つた爲に、何となくその方が良さそうに見へたりなんか致しまするので、自然と思想上の變化を見る事になつたものと見へるのであります、それからまた生活問題が八ヶ問題になりましたので、職業に對する觀念が熾にな

のは決してかゝることを致すべきものではないと云ふて、慎んでこそ尊敬すべき御婦人となるので、自然々々と男子の心に敬愛の念を生ぜしむる様になるのであります、今の新しい婦人の様なことでは到底男子の同情を得らるべきものではない、從て世間の道德を美しくする譯には參らぬのであります、それにまた教育の程度が高くなりましたので、御嫁入りの時期が遅くなり、從ては自分の身分が不安となりなすから、どうしても獨立の思想が起さなければならぬので、其結果は家庭の外に生活の根據を求むるとか、家庭の外に安心と幸福を求めんとするとかいふ事になるのであります、之は誠に結構なことの様ではあります、その結果は男女同權とか云ふ途方もない思想が出来て參るのであります、男女同權を途方もない事と申しましたなら、新しい婦人の方々は非常に御立腹になるかも知れませぬが、元來男女の間には、同權とか同等とかいふて争ふべきものではないのであります、若し萬一權力關係が生じたなら、一家の内はどんなになるてあ

りましようか、夫婦の間は敬愛の二字が大切でありま  
す、権力の争などを持ち込むべきものではありません、  
権力関係は一種の敵対関係であります、吾れが／＼  
と云ふて権力の争をしたならば、一家は乱脈となら  
なければなりません、男は男、女は女、夫は夫、婦は  
婦といふ風に各其守るべき處を守り、決して相互に羨  
ましくも嫉ましくも思はぬと云のが大切であります、  
若し鼻が銀座通りの様な顔の真中に威張て居るのに耳  
の方は裏店住居であるからといふては怒り、耳が音  
樂を聞て居る時に鼻に聞えぬといふては羨やみ、鼻が  
良い香を嗅て嗜しがつて居る時に、眼や耳が自分は誠  
につまらんといふて嫉む様では何事も成り立つもので  
はありません、鼻が良い香を嗅て嗜しがると反對には、  
如何にもいやな臭氣を嗅されていやな思ひをする事も  
あります、耳が精味嗜を腐らす様な話を聞かされても  
決していやだから鼻の方にオツツケルといふ事はあり  
ません、各々其れ自身の分に從つて泰然として其任務  
を盡し、斃れて後止むの決心あつてこそ美しき味が生

ずるのであります、之と同様に男は男の守るべき道、  
女は女の従ふべき道を立派に守り、假令男が如何なる  
事を致しても之を諫めこそすれ、羨むといふ事は決し  
てないといふ工合でなければ美しき風俗を作ることは  
到底出来ないと思ふのであります、然るに世の中には  
如何にも挑発的な議論を以て婦人方の味方になり、反  
て婦人を墜落せしむべき中介となるものが多いので、  
其甚しきに至つては、立派な先生方何博士とか云  
ふて居りながら、愚にも付かぬ場あたりのよい事をい  
ふ人があります、「女性の貞操を征服と心得、征服せ  
られたる女は勝者たる男に従ひ、其命を絶対的に守る  
べき義務がある、婚禮は降服の誓言をなすべき一種の  
儀式である、既に此誓言をなしたる女は一生、夫の自  
由になるので、全然自分の自由を失ふのであるから體  
のよい降伏である」と云ふ様な事を尤もらしく説く學  
者先生が少なくない、そうして征服の證據としては昨  
日迄何某の御嬢様とか何子さんとか言ふて居たのが、  
婚禮が済むと御嬢に呼び捨てにされて仕舞ふのが其體

操であるといふのだ、之は如何にも尤もらしく聞える  
のであるが、そんな外面の關係のみで尊卑の區別が  
出来るものではありませぬ、西洋では婚禮しても征服  
の意味がない、男女夫婦の關係に優劣がないといふて  
は居るが其名刺を見ると、奥様の名刺は夫の名に「ミ  
ツメス」と付ける計りて自分の名前は決して用ひない  
此點から見ると、女の存在は夫を持つと同時に認めら  
れなくなつた様なものであります、之に反して日本  
では極ハイカラな奥様の外、通例名刺だけを變える計  
りて御自分の御名前はチャント御名刺に御書きになる  
のであります、○甲野乙次郎の妻君は大のハイカラであ  
つたとすれば、簡單に甲野乙次郎妻とばかり御書きに  
なつて西洋風をまねらるゝのであります、日本の風  
に從ひますと、甲野花子といふ風に御書きになりま  
すので、立派に御自分の存在を示して居られます、若  
し月の世界が火星の世界にても日本の名刺と西洋の名  
刺を送て判断して貰いましたならば、日本は男女同權  
國で、西洋は男尊女卑の國であると判断するであらう

と思はれます、高事こう云ふ風には参りませぬが、唯  
だ皮想の見計りて日本の方がよいとか悪いとかいふべ  
きものではないのであります、どうしても色々點か  
ら考へて見て、果してどちらが日本に適して居るかど  
ちらが本道に正しき道であるかといふことを吟味して  
見なければならぬのであります、一寸見ました所では  
西洋の方が女が威張りて居る様であります、どちら  
が果して幸福でありませうかどどちらが果して道に協  
て居るでありませうか、夫婦の關係は決して分離すべ  
きものでない、異轉同心でなければならぬといふ事  
が道に協ふとすれば、西洋の方は各個／＼になつて居  
るので、夫婦の間に何の隔てもないチャンと結合して  
別々にならない日本の方が宜しいに相違ないのであり  
ます、日蓮上人の仰せに  
女人と成る事は物に隨つて物を隨へる身なり  
とあります、この御言葉などはよく我日本國の御知  
人の心得を示されて居らるゝのであると考へるのであ  
ります、凡そ何事でも堅いもの同志では融合する事は

出来ませぬ、兩方で我が／＼といふては到底平和は保  
たれませぬ之は何うしても、柔の徳と剛の徳とか御互  
に結び合はなければならぬのであります、荷車よりも  
護膜輪の車の方が乗り心地のよいのも、堅い石や鐵の  
間に柔かい護膜があるのてあゝ云ふ風に乗り心地のよ  
くなるのでありますから、物事はどうしてもこう云ふ  
風でなければならぬのであります、日蓮上人は更に亦

男は柱の如く女は桁の如し

と仰せられて居ります、いくら立派な柱でも桁がなけ  
れば立つて居りませぬ、柱と桁とよく接合して其間に  
少しの隙もない様になつて居らなければ、何か大風で  
も吹きまする時は、離れ／＼になつて倒れて仕舞ふの  
であります、柱は柱桁は桁といふ風にチャーインと定つ  
て居りますから萬事工合よく參るのでありますので、  
決して其間に尊卑の區別はないのであります、日蓮上  
人の御思想を拜しますると、更に一段と女の位地を認  
めて居らるゝのが分ります、  
矢の走るは弓の力、雲の行くことは龍の力、男のし

わざは女の力なり

と仰られて居られますので、女の方がなければ男の働  
きは充分には參らぬと仰せられて居らるゝのでありま  
す、男は朝夕御國の爲に御奉公を勤み、女は優さしき  
心を以て兒女を養ひ、外に在りて働く夫に家を顧みる  
の煩ひなからしむるのが女の務めでありませぬ、この點  
から考へて見ますれば、男は男女は女といふ風に自然  
にそれ相應の務めがありますので、銘々の得手勝手  
に柱になつたり桁になつたり弓になつたり矢になつた  
り致すのではなく、詮する所男は外に働き、女は内  
に働き、内と外と相佑けて完全な働きを致すのであり  
ます、然るに世の中には女の解放と唱へて女に自由を  
與へなければならぬといふ議論をする御方があります  
之は誠に御女性の爲に親切な議論の様に見えませぬが、  
其實決してそうではありませぬ、つまり一種の迎合で  
なければ一種の悪平等に促はられた間違だらけの思想  
であります、元來東縛とか解放とか云ふ事はどう云ふ  
事でありませうか、我日本國の御女性方は果して東縛

されて居るのでありませうか、一時の間違つた習慣と  
して少しは東縛の氣味もありますが、其實際に於ては  
少しも東縛されて居らぬのであります、我儘な事を致  
すことが出来ぬのでそれを東縛といふならば、それは  
東縛に相違ないのであります、決して道理なき東縛  
を受けては居らぬのであります、婦道として嚴格に過  
ぎるといふ議論ならば改良の必要があるかも知れませ  
ぬが、東縛と云ふ意味はないと思ひます、解放の要求  
と云へば何んだか籠の中に入れて入れられた鳥の様であ  
りますが、日本の御女性方は決して籠の中に幽閉され  
て居るのではありません、軍艦の機關士は職務中甲板  
の上に出る事が出来ずして艦の底の方に居なければ  
ならぬが、之を以て幽閉といふ事は出来ませぬ、職務  
の爲に機關室を出ぬので決して東縛されて居るのでは  
ありません、幽閉されて居ると思へば幽閉でありませ  
うが、之は老へ様一つてあります、昔の士人は人の上  
に立つて大分威張つたものであるとてあります、  
いつても自分の身を捨て、御主人の爲に盡さなければ

ならぬ、いやだからといふて打ちやつて置く譯には參  
りませぬので、之は考へる持ち様によつては立派な束  
縛でありますから、箇人主義に促はれた人から見まし  
たなら、女性の解放處が士人の解放を唱へるのであり  
ませう、併し實際は決して東縛ではないので、士  
の道の爲に縛られて居るのであります、此點から考へ  
て見ますれば、日本の御婦人方は女の道の爲にこそ縛  
られて居りますが、何の道理もなく縛られて居るので  
はありませぬ、日本の道徳の本源は、自身の幸福を犠  
牲にしても捧ぐべき人に身を捧げるといふ點から起さ  
るので、自個本位の主義とは全然反對であります、西  
洋の道徳は個人を本と致しまするので、御互に個人の  
權利を害せぬのが道徳であります、日本の道徳は愛  
の極所から起さるのであります、例へば茲に一人の女  
性があると致しますれば、若し無理にも或男と一處に  
なりませすれば、反て其男の不幸になると云ふ場合には  
自分の愛を捨てて思ひ切るのが愛の極處であります、  
假令思ひ切る事が出来なくても身を退くのが愛の極であ

(四) 女子の解放は自由を以てせしむる事なり

る、之に反しまして無理をしても自分の愛を通さうと致しませぬのは、自分の我儘を通ふすので、つまりは利己主義の思想に捉はれたものと申さなければなりません。之は日本の道徳ではありませぬ。

この頃はどういふものか、個人の権利とか申しまして我儘を通す事をよいとする一種の思想がはやりまして、御婦人方の中にも少からず放縦に流るゝ方のあります。此頃の芝居に「ノラ」とか「ドラ猫」とかいふ女が出まして、自身のこれ迄の生活は人形の様な生活で、自分の家庭は人形の家も同様であるからといふて家を出して真正の生活を求め様とするのださうであります。一寸面白い様ではありませぬが、之などは箇人主義の極端と言はなければなりません。「ノラ」自身はそれでもよい気分かは知りませんが、家の人はどんなに嘆たてありませうかどんなに不幸を感じたてありませうか、もしも「ノラ」が男であつて家の主人であつたとすれば、家中の不幸はドンドン支けてありませうか、「ノラ」は自分の我儘の爲に人

の性  
の故

い高貴な品位を備へる事は到底出来ぬのであります。序でながら申上げますが、この頃は全体に大分奢りが長じて参つた様であります。獨り奢りが長じて参つたのみならず、無闇におしやれになつた様であります。丁度十年前程前に小さな瓶の香水を使つて居た日本人は今日は七十餘倍になりましたので、恰度ビール瓶位でがブー／＼振りかけて居るといふ様子であります。化粧石鹸などもまた同様で、これまた七十餘倍であります。から、かゝる無用の事に費用を懸けるのは嘆はしひ次第であります。ビカ／＼と磨いた金は一寸奇麗ではありませぬが、ユブシました金の方が奥床しい趣があります。同じく御召しを召されても表ばかり立派で下衣も何も粗末であるといふよりも、寧ろ裏や下衣の方が宜しいといふ様な思想が日本道徳の爲に必要であります。併しそれも極端に走り、羽織の裏に立派な大家に書を書いて貰つて、いつても人の前にこれ見よがしに羽織を脱ぐといふ様ないやな奴は別として、外よりも内の方の立派な方がいつまで経つても味がある様であ

の苦みを願みぬので、少なくとも我日本の道徳の罪人のてあります。日本の道徳思想から見ますと、自身の趣味を犠牲にしても家人の幸福を計るのが道であるので、日本の御女性はいふ風を道徳の爲に縛られて居るので、若し婦人の解放といふ事が事實にあると致しますれば、それは女の道から解放さるゝと云ふ事でありませぬので、誠に以てヒドイ事になるであらうと思ふのであります。こう風に考へて見ますれば解放など云ふ事は、誠に道理のない事で、御女性を放縦な生活に導くので實に恐るべきこととあります。何事によらず自分を主として考へますと、自から虚榮心が起きます。虚榮心は必竟自分を美しく見せたい立派に見せたい、ただ／＼見せたい／＼といふ穢な考へが即ち虚榮心であります。香水などでも瓶の口を取つて置きますれば、パツ／＼と消ふて仕舞ますが、筆筒の中の香料はいつになつても香ひます。朝から晩まで見せたい／＼といふ風で、何でも箇ても人の先に目ようとする様な事では、何時までも奥床しい慕はし

りませぬ

虚榮心の深き女性に向つて萬事控へ目にデミな風を

せなければならぬといふて見た處が、つまらぬ譯かも知れませぬが、茲に我日本の婦人の爲には此上もなき難有訓誡があります。それは申すも恐入る譯ではあります。高輪御殿に御出て遊はされました御二方の内親王殿下の御逸事であらせられます。日露戦争の開始になりました頃、殿下御揃ひにて御参内遊されまし

た時、先帝陛下より此度は露西亞と開戦になつたが、向ふは大國の事であるから容易ならぬ一大事がある、御身等は女性のあるから別の事ではあるが申聞けて置く、戦争は永くなるかも知れぬ、従つて費用もまた多くを要する譯である、上一一同同じ心で險約をせなければならぬといふ御教訓あらせられたと申事でありませぬ、そこで兩殿下御歸殿の後、御兩方様にて何か色々御相談の上仰せ出されましたには、我々は女の事て何も御役には立たぬが、せめてもの心遣しに此戦争中衣類を新調せぬ事に致したから其の積りてといふ御

(六)

(七)

沙汰であつたといふ事であり、御奉仕申上げて居るものも之は誠に難有御沙汰と心得て、其通りに取計つたさうでありますが、如何に御賢明なる宮様とは申しながら、御女性の事であらせられまするので、絶對的に新らしき御召の御沙汰のない筈はなからう、何に致せ難有き仰せてあるから先づ其儘と申し御仕へ申上げて居つたさうであります、御裕の御時になりましても炎暑の御時になりましても、御新調の事を御許しになりませぬ、再び御裕の御時になりましても冬になりましても、古いので宜しいと仰せられて一向御聞き入れになりませぬ、モ一こうなつては臣下の者の方が苦しいのであります、そこで一同宮様方の堅き御志は誠に難有次第ではあります、若しこの事が世の中に知れ渡りまして臣下一同の訓へになりましますならば兎も角、御自分様御ひとり御苦しみ遊ばすだけで何の御役にも立ちませぬ、除り古い御召を遊されても御宜しくありませぬ、少しは御美しき御召も召されまされにと申上げましたさうであります、中々御聞き

入れになりませぬ、心さへ美しければ衣裳などはなんでも宜しいと常に妾が申すてはないか、世の中に知れ渡る爲に致すのではない、たゞ安心の爲に致すのであると仰せられてどうしても御用えになりませぬ、とうとう平和克復の時まで一度も新しい御召を召されず、御軍衣の如きは同じ御召で丁度三夏を御通し遊された事になると云ふ事であり、そこで彌々平和克復になりまされたので、舊の如く御沙汰があり萬事常の如くに遊されたさうであります、新しい御召を召されませぬに御出て遊はしましたので、其間の御費用をそのまゝにと仰せられて御意匠の記念品を御拵へ遊ばしまして、戦後拜謁致しました際に、私共にも賜りましたのでありました、その節まだ誰にも話さぬがと云ふて、御奉仕申上げて居る方より御話してありましたので、其話を承りまして思はず落涙致した次第であります

されたと申す事は、既に云ふ難有事でありませうか、心さへ美しければ宜しいと妾も常に申して居るてはないかと仰せられましたと伺いましては、世の中の御女性方は襟を正うせずに居られますといふ存じます、又殿下は、出征者に乗せました輸送列車が東京を出発致しまする際には、何時でも御庭に立たせられて列車の走る音を御聞きになり、心ばかりに御送り遊されたといふ事であり、假令列車の出発が深更でありましても、一時二時三時でありましても、必ず御召物を正されて御庭に御出て遊されて御心送りをなさせたまひ、然る後に御寝み遊されたと申す事であり、斯の如き御心緒は何と云ふ難有事でありませうか、斯の如き床しき御心根に、實に我日本國の御女性の至高なる道德の根元であり、或は見送りとか或は歡迎とかに奔走日も足らんと申す事は、美しき事には相違ありませぬが、大切の家を明け放つしにし、ア一てもないコウでもないといふて身装に持つものに奢りの限りを盡し、心の内では驕奢を競いながら名聞の爲に

奔走する一紙の御女子の如きは、この難有事實を弄したならば如何に感ずるてありませうか、考ふれば考ふほど味深く奥床しき御心根に感泣する外はありませぬ、申すも畏れ多い事であり、この難有き事實の殊更に難有感じまするのは、當時より世の中に持て囃されずに長い年月の間埋れて居りまして、たゞ僅かに氣色ばかりの芳香を拜したのみであつたと云ふ事實であります、如何なる美言でも善行でも名聞の爲とありては何の價直もないのであります、瀧の如く香水を流しかけたる毒々しい香は俗悪で鼻持ちもありません、高尚な淑やかな良い香がいづこともなく人の心を引きつける様なワザとならぬ床しさを覺へるのは、高尚なる御女性の精神的流露とも申すべきものであらうかと存じます、この邊の處か演題に選びました身退けは名進むの意味であります(續)





# 日蓮主義と思想の訓練

## 三 上 義 徴

今の時代は生活上の競争が劇しいので、或者は單に享樂主義の熱に浮されて本能衝動のまゝに其日を送りつゝあるものを見るが、之等は全く物欲的生活に在るもの、稍や獸性的傾向がある、從て斯かる衝動的な生活に在るものは、人自身の内在的神性を發揮するに氣が付かぬ、さらに道德宗教上の權威を尊重するの敬虔の態度を缺いて居る、斯かるものは其精神生活が貧弱であつて、人間としての全体の自己を自覺せざるものてあろう、されば自己が自己の人格を否定し去るに至るのである、而し之は人自身としての價直がない、人は物的欲望の満足を得ることの大事であるのは言ふまでもないが、亦一面には豊富なる内的生活を遂ぐべきものである、この内的生活は堅實なる立志より起る

はさねばならぬ、日蓮上人は

魚は命を惜む故に池に栖むに池の淺きことを歎きて池の底に穴をほりてすむ、しかれども餌にばかされて釣をのむ、鳥は木にすむ木のひきき事をおちて木の枝にすむ、しかれども餌にばかされて網にかゝる、人も又如是

と仰せられて、人間思潮の傾向を洞破し去りて薄志弱行の徒を警められて居るが、いかにもこの豫言的警訓は一分の誤りなく現代を看破し盡されて居る、上人の卓見には何と云つても敬服せざるを得ない、懶け根性を有つたのらくらものは劣情のみに囚れて、一點崇高の志を缺いて居るから、日蓮上人の不斷の活生命に感觸して訓練百番の功を積むのか宜い、上人の一代は獨力奮闘の活歴史である、人間を中心として以て最大の幸福を地上に來さんかために活動せられたのであつて、其青年時代には十有餘年の研鑽修養を積み、思想上には透明ある識見を蓄ひ、四面敵陣の中に正義の清節を拜して法國の發展に従ふたのである、即ち道に對

志を立つるそこに人生に深き意義を存する、彼の山廉素行先生は士道論の中に「志立たざれば道に進むべきやうなし」と論じて立志の要義を明かにして居る又孔聖は「十有五而志學」と論語にあるが、人間性の修養と發展とに於ける徑路を説き示されて居る、更に亦陽明學派は知行合一の實踐的倫理を主張して、志立たざれば氣昏し」と言ひ、牽乎不復の志を立つべきを教へられて居る、この志が立つて來ると、必ず發憤の熱力が湧いて活きた精神が起る、横着な不真面目な根性は即ち發憤ではない、論語の中に「發憤忘食」と云ふ警訓の大文字があるが、ほんとに心の底から發憤するものあるならば煩悶痛苦の念は消えて、食事を忘るゝほどに喜びの感に打たれつゝ向上の歷程を進むことが出来る、立志、之れ吾人が人生に處する第一歩に於て決すべき大問題である、然るに之に意を用へないで眼の前に現はれた事柄にのみいたく發憤するのは、永久不滅の意義を缺けるものである、人はどうしても永久存在の自覺に立つて、人自身の内在性を顯

する機性の精神を磨き、不撓精進の活動に努められたのである、上人は當年日本國民より大迫害をうけたのであるが

如何に強敵重なるとも努々退く心なく恐るゝ心なかられ  
 と宜言し、堅實なる自覺に立ち法悦的憤りを發して大德教の實現を期したので、獨立的積極的に統一の信條を絶叫して芥子ばがりも因循倦怠の風がない、終始消極的思案に耽くるを戒つて熱實なる實行を促がしたのである、上人の堂々たる威風と剛健の氣節は凜然群を絶し犯すことが出来ない、上人の如きは人間としての全体の生活を營まれた偉大なる人格である、而して上人は純乎たる宗教家であるが亦一面には忠良なる日本國民である、其大義名分を論道するや、滿腔の熱涙を湛えて北條の暴逆を叱責するの所、侃々諤々一步も假借する所なきは痛快に堪えない、北條の一門も理には屈せるものあつたと思ふが、其權勢を一擲し去るの勇氣なく、唯だ五十年の短生涯に於ける物欲の満足を得



るがために、千古の大偉人に對して大侮辱を加へ、理不盡にも政治上の名を籍りて佐渡の島に流したまふたので、全く其行動や傍若無人非常識の沙汰である、九月十二日に御勘氣を蒙りて今年佐渡の國にまかり候也

とあるが、文永八年十月以來同十一年二月の中旬に至るまで、風寒く雪深き北海の孤島に送られた、而かも其間、木化上行の自覺に進んで宗教本來の教義を發揮し、人類思想の統一開顯を示し、その大自覺と大抱負を披瀝して

「本より存知の旨なれば始めて歎くべきにあらず」

「流罪の事いたく歎かせ給ふべからず」

と仰せられて居る、佐渡に於ける上人、少しは弟子の給仕や信徒の供養があつたので、丸て食ふものもなかつたとは云はれないが、不足であつたことは想像が出来、斯かる物的生活の果敢なき生涯ではあつたけれども、其内的生活がいかに豊富であるか窺はれるこの生活状態の上に満足と思安と向上との活潑が充

思ある人をもたすけんと思ふ

と仰せられて、總ての人に對する敬重慈愛の熱涙が溢れて居る、さうしてそれは理論でなく文字でなく、上人自から色讀せられたまふたのであつて、其全幹が活現靈化せられたのである、苟くも人たるものはかゝる人格の價置を發揮せねばならぬ、吾人は智淺く行鈍くして上人の如く全分を開發することは出来ないか知らぬが、自から内省して洗練陶冶するならば、必ずや上人の如き高邁なる風格に近づくを得るであらう

鐵は炎打てば劍となる

とは在島中信徒に與へたる教訓であるが、千古萬世に力ある警句である、この文字の内包的精神は今なほ激濁として不斷の活生命を有し、吾人の思想訓練に對して策勵努力を促がすものあるを感ずる、真に然うてはないか、人生一切の事、百鍊鍛冶の功によりて開拓せらるゝのである、「炎打てば」の警句、げに情夫をして起たしむるの力がある、いかに放縱の夢に耽りて居るものでも、この警句が耳に響くならば枕を蹴つて覺

實して居から、そこに何等痛恨の念の起らう筈がない日蓮は日本第一の富めるもの也

とはこの時代に於ける法悦の叫びである、信仰と生活の調節、蓋してゝに至つて妙と謂はざるを得ない、この信仰と生活との二面が、適常に調節せられて天地の本源と一如し、絶對無限の佛陀の大慈念と接觸するのとき、凡身である小我の自己は宇宙の大我と靈化し、時々刻々無限向上の理を味識するにいたりて大自覺の聖境に到る

心は法華經る信ずる故に梵天帝釋をも猶恐しと思はず

と言ふ確信の叫びは即ちそれである、從て單なる現實生活の小我的思想は消去して、自他不二の極微に達し、菩薩の大精神突發して君子的行動を表現し、そこに盡さざる無限の生命を存する

「詮する所は天も捨て給ひ、諸難にもあひ身命を期とせん」

「本より學文し候し事は佛氣をさはめて佛になり

醒の舞臺に進み得ることであらう、斯くして自己を最へ上げつゝあるのとき、その思想の歷程は現實と理想との調節的問題に進み、自己と國家との關係を考察するに至り

世間の爲にも佛法の爲にも吉かりけり吉かりけりとはげむべし

と云ふ嚴誠を實行することが出来る、こゝに至りて法悦的生活となる、自己の生活が法悦的であるならば、物心二面の調節が出来「苦樂思ひ合せて」と云ふ何とも言へぬ人生の趣味を得ることであらう、

吾人は心の駒の狂へ廻らぬやうに、つねにしつかと手綱を引き締めて、生命ある警訓を色讀して光輝ある生涯を送ることに心懸けねばならぬ。



## 近代文明と國民の態度

文學博士 姉崎 正 治

工合に進むか、又吾々はそれに對して如何なる態度を執るべきかと云ふ問題を生じて來るのであります

今茲に中世文明と云ひ、或は近世文明と申しますのは、主として西洋、殊にヨーロッパを舞臺とした中世並に近世のことを申すのであります、然るに此區別は獨り西洋に存在して居たのみならず、吾々の日本にも同様の區別があるのであります、さうして西洋の中世紀文明が破れて、近世の文明がそれと異つた方面に發展して參つたと同じやうに、日本にも矢張り、時代から申さば餘り古くはありませぬが、丁度西洋の中世文明と同じやうな文明が發達し成熟して、さうしてそれの破れた後に、現在の文明を得て來たのである、現

在の文明が東洋に與つて來たのであります、それ故に現在の文明は獨り日本の文明でない、世界全體を通じて文明であつて、殊に其源はヨーロッパから出て世界に及んだ文明で、吾々も其一部分に今參加し、又將來は場合に依ては其大立物となり、指導者となつて働かなければならぬ運命に遭遇して居るのであります、丁度、西洋で今から四百年ばかり前に、中世紀の文明を打破して、それより以後近世文明の特色を種々の方面に發達して來たと同じやうに、我が日本國は、今から五十年前までは中世文明の状態に居つて、それより以後、所謂近世的の文明を發達して今日に至つたのであります、西洋に於ては、中世紀の文明から近世に轉ずる間に、勿論外部の刺激もありましたが、多くは内面からの事情因縁に依て變化を來したのである、日本に於ても、徳川三百年の間に、内部の事情は段々今迄の儘に止まる事が出來ないで、所謂新方面を開拓しなければならぬ状態に進みつゝあつたのであります、所へ外の方からして、所謂近世文明が這入つ

て來て、内面の事情と外部からの刺激とが一齊になつて、非常な動搖を來したのである、例へて見ますれば西洋の中世文明は段々に眼目が醒めて來たと云ふやうにして近世文明に這入つたのである、日本は今まで眞夜中であると思つて寐て居つたのである、多少寢言を言ひ夢を見ながら、少しはもう明け方になつたと云ふ心持はあつたにしても、未だ戸を締めて寐て居つた、其所へ持つて來て、俄に外から周章しく戸を叩かれた、驚いて起きて戸を明けて見ると、日光が赫々として照り輝ひて居る、さうして其日光の眩い中に這入つて活動せざるを得ないやうになつたのである、西洋の文明に於て、四百年前に中世から近世に移る間には中々動搖が烈しかった、色々の紛擾もあれば煩悶もありましたが、それが又一層烈しく短い間に日本に於ては起つたのであります、さうして今日に於ても尙ほ、昔の即ち徳川時代の道物が有形無形の間に中々這つては居ります、此力は未だ全く無くなることは出來ませぬが、到底之を古に回復すると云ふことは出來ない、

所謂る乗り出した船である、此の新たな文明の潮流に乗じて、乗り出さなければならぬと云ふ運命に遭遇して居る、引くことが出来ない状態に在るのである、若し之を一步退かうと思ふなれば、昔の鎖國時代に復へるより外ない、併ながら元和偃武の後に通商貿易を鎖し、外國の文物通商を謝絶した如き昔の状態に復へらうと云ふやうなことは、吾々の夢にだも考へることは出来ないのである、併ながら今申した通り、日本の文明は俄かに近世文明の真晝中に飛出したのでありますからして、未だ夜中と思つて寝て居つた人々の中で眼はさました、また夢を夢みたり、又寝とぼけて居る人が大分遺つて居る、それ等の人々には唯昔を慕ふやうな考へもあり、昔に復へたいと云ふ勢力も存在して居る、成程夜中にちつと安眠して居るのは樂である、誰もそれはして居たい、夜が明けて外へ飛出して活動するのは苦痛である、出来るならば元との通り安眠したいが、既に日がたけて東の空高く日の昇つて居る時に安眠して居つたならば、其人は即ち世界の文明

に後れを取る落伍の人になるのは勿論の話であります、吾々の今日の状態は矢張り同様である、所謂乗出した船、或は騎虎の勢いと申しますると已むを得ず、に段々船を乗出して行くやうてあります、吾々は此際に仕様がなから此文明の潮流に乗じて行かうと云ふやうな考へで居つてはならぬと思ふ、何所までも乗り出した船である、初めは或は已むを得ず乗出したのかも知れない、併ながら一旦乗り出した以上は、立派に航海を遂げなければならぬ、どん／＼と船を進めて行かなければならぬ、是が即ち今日の吾々の状態であります、中世文明の特質と近世文明の特質とを對照して見ます、矢張り兩方に實に能く似た所がある、西洋では四百年前に終りになつた中世の文明と、日本では五十年前に打破された徳川時代の中世の文明とは能く似た所がある、そこで之を打破して進んで來た今日の文明は、日本に於ても又西洋に於ても、同じ事情が生じつゝあるのである、吾々は又先程申した如く、世界の大舞臺に乗り出して居るのであります

から、其間に於ては西洋のみならず世界と共に同じ特色を段々發揮しつゝあると云ふことは、是亦申す迄もないことである

中世文明と近世文明とを對照し、第一に吾々の眼に付くことは、中世的氣風と云ふことは、何事も定まつたものを貴ぶと云ふ氣風である、之に反して近世思想は何事も活動を貴ぶ、斯う云ふ根本の對照がある、之を社會の組織の上から申しますれば、西秦の中世紀には、勿論色々の變化がありました、段々由來を申せば長くなりまするが、是から年代のことを申すに西洋年代で申しますが、五世紀から十世紀頃まで五百年位の間は全然戦亂の世の中、亂世であつたのであります、それが十世紀から十四五世紀の五六百年の間は先づ秩序が立つて、勿論此間に動搖はありますが、秩序が立つた、さうして國を支配し、又人の思想を支配する根本の考へとしては、何事も根本的に定まつた權威があり理想がある、此の定まつた基礎の上に立つてさうして之を實行するのが人間社會の職務であると云

ふことが理想になつて居るのである、唯へは政治の上で申しますれば、中世紀の間にはヨーロッパ全體を支配する皇帝と云ふものは事實に於ては無かつた、併しながら理想に於ては存在して居る、昔世界を統一して居つたローマの帝位を承継いだ神聖なるローマ皇帝が世界に君臨すべきである、する筈である、是が政治の根本主義になつた、それ故に皇帝なる者は事實に於ては極めて微弱なるものでありましたが、それより以上の君王は、皆王若くは公と稱して、決して帝を稱する者は、一人も無かつたのである、實力に於ては皇帝を凌ぎ得る者は、澤山あつたに拘らず、稱號の上には、帝を稱する者は、此の五六百年乃至七八百年の間は一人も無かつたのであります、謂はゞ大義名分に於ては、皇帝の神聖と云ふことは立つて居つたので、即ち斯の如く古代から定まつた形式、定まつた權威を元とすると云ふ思想が如何に人心を支配して居つたかと云ふことが此の一事でも見える、實力に於ては如何にてもすることが出来るに拘らず、大義名分即

ち稱號の上に於ては之を動かさずに居つたと云ふことが、政治の上に現はれた中世紀の特色である。

又思想の方面から見ますれば、ローマ教會が其の信仰筒條を固めて、法王が其の教權を代表し、さうして人間の思想信仰は皆之を法王に仰ぐと云ふ状態であつた、之に反抗する者は時々出ましたが、皆征服され、異端とされた、彼等自からも異端と云ふことを承知して居つた者も随分多いので、根本の思想はローマ教會が之を代表して居た、此の思想は強く人心を支配して之に背くのは即ち異端邪説であると云ふ信仰が一般を支配して居つた、又之を社會組織の上から見ますれば封建の状態に於て、各國の領地が大體に於て定まつて居る、是も勿論變動はありましたが、さうして土地財產は皆領主の所有である、其範圍内に住居して居る人民は領主の財産の如きものである、彼等の營む職業、彼等の作り出す所の産物、皆其領主の御蔭に依つて出来たものである、斯の如く見て居りましたからして、人は自分自からの職業を變換すると云ふやうな考へはない。

ずと云ふことは即ちお目出たいと云ふことであつた時代である、それ故に今一々日本のことを申上げる必要はない。

斯の如き文明が、西洋に於ては五六百年間續いて参つたのであります、何れの國に於ても、社會の狀態が有形無形の方面に亘つて、此様に一定して動かないやうになつて來ますと、どうしても人間が變革を要求するものである、例へて見ますれば、冬寒い時に吾々は室内に居つて暖かにストーブにあたつて居ることとは、誰も好む所である、併しながらそれも長い間續いては矢張り退屈する、外へ出て冷たい風に當りたいと云ふ考へも起つて來る、又空氣も要るくなつて來ますから、空氣を清らかにする必要がどうしても生じて來る、今申したやうな中世の狀態が數百年續いたのである、日本に於ても殆ど三百年續いたのであります、人間はどうしても此の狀態では満足することは出来な、理窟はどうであるか知らないが、人間の天性が之を許さない、相變らずと云つてお目出たがつて居るの

一向出て來ない、先祖代々傳へて來た所の職業をあとなく忠實に守ると云ふことを銘々何よりの美德として居つた、又社會の事情も變換を許さない、一個人が野心を起して新事業を起すと云ふやうなことを許さない状態にあつたのであります。

其外細かなことを申上げれば色々ありますが、斯の如く中世紀に於ては、何事も宗まつたことを守ると云ふことが、社會全般のことを支配する制度になつて居つたのであります、是だけ申しますれば、殊に日本のことを申上げる迄もなく、諸君は既に徳川時代と、今私が西洋中世に就て申上げた所々を比較して、御覽になつたならば、明白になるだらうと思ふ、足利氏の未數百年の戰亂を徑て、其混亂の状態を治める爲に、家康が覇府を江戸に立て、此國を支配した時の政策、それより以後殆ど三百年の間天下を支配した大勢、又人々の思想と云ふものは矢張り何事も定まつたことを責ふと云ふ氣風であつた、動くことを許さない、相變らず

は結構ではあるが、餘りお目出たくなると、人間は終にお目出たい人間になつて仕舞ふ虞れがある、國家に目出たからざる事でも仕出したいと云ふ考へが起つて來るのである、明治維新の變革に於ては、其前からして斯う云ふ勢力が段々集つて來て、さうして外の方から叩いて來た刺戟と合して、遂に徳川幕府を倒して所謂維新の政治を開いたのであります、西洋に於ても矢張り同様の變革を経たのであります、併しそれが多くは内部から出たのであります、尤も外部の原因もありませんが、内部の方から出て來た方が多いのであります。

重に西洋に就て申しますれば、中世紀の文明に對して變革を希望する精神は、文明の成熟完備した状態にあつた時から出て居つたのである、此ことも詳しく申すと長くなりませんが、ローマ法王の權威が最も盛んになつた時は、即ち其範圍内に於て、既に新機運が動きつゝあつた時である、又封建制度が熟して参りました時には、既に封建を打破してそれをもつと大きく

纏めて國家を造らうと云ふ、即ち國家主義の發達しつゝある時代であつた、斯の如く内部から段々動搖が起つて居りました間に、又其所へ外部の事情が附加はつて來たのである、其外部の事情の中で最も大切なものは、即ち新大陸の發見であつたのであります、十五世紀の末に當つて今までヨーロッパ人の知らなかつた新國が分つて來た、西の方にも東の方にも、さう云ふ國が出て來て交通が開けて來た、人々は其方に商業を營み、或は移住をしようと思ふ念慮を勃々として起すやうになつて參つたのである、是が非常な刺激になつて、人心の動搖は止めんと欲しても止めることが出來ないやうになつたのである、併し茲に一つ諸君の注意を願ひたいと思ひますのは、斯の如く外から加はつた事情のやうであります、此新大陸の發見と云ふことも矢張り内部から出たことなつて、即ち人心は今迄のヨーロッパの天地にもう飽いて來た、何か新たな方面が無いかと云ふ希望が勃々として抑へることが出來ない、其氣風か或は古の美術文學を尋ねる活動

來て開港を迫らないでも、日本人自身の中から外國に出掛ける、外國の文明を輸入すると云ふ活動が起つて來たらうと思ひます

それは兎も角と致しまして、今申上げた新大陸の發見と云ふことも、元を尋ねれば人心が變化を要求した勢力が顯はれて、斯の如き發見となつて來たのであります、此の發見は、人間の精神並に生活の状態に非常な影響を與へたのです、其前からして既に東洋との交通はありましたが、斯の如き新大陸の發見が出來るに及んで、今まで吾々の住んで居らぬ世界があつて、殆ど面目を一新したやうな心地がしたのである、人々は唯自分の先祖以來の土地に住んで、先祖以來の職業をして居れば宜いと思つて居つたのが、すつかり打彼されて、新たな國へ行けば、黄金が樹に生つて居る、地面には寶玉が散かつて居ると云ふやうに考へて、是は勿論迷ひてありましたが、兎に角斯の如き思想に動かされて、どし／＼外國に出掛けて行く、出掛けて行つた人間は、初め考へた如く黄金が地に散ばつて居た

になり、或は學問の方面に於て新な實驗をして見る活動になり、又其一部分が新大陸を發見すると云ふ方面に向いて來たのである、今まで知れない大陸が西東にあると云ふことは、前から知つて居たのです、大陸は存在して居る、併し之を探り當てやうと云ふ精神は矢張り外から來たものでなしに内から出たものである、ヨーロッパ人が今迄の世界だけに満足せず、新たな世界を發見したいと云ふ希望が、コロンブスの發見になり、バスコダガマの發見になつた、外から來たやうであるが實は内から動出したのであります

此點は日本と參照して御覽になつても同様でございますが、日本の明治維新の時には、外からの刺激が最も強かつたのである、併しながら其前からして既に餘程西洋の文物を見たい、觀察したいと云ふ精神は盛んになつて居つたのであります、是は徳川時代に於ける蘭學の歴史を見れば分りますが、水戸に於ても佐倉に於ても開國の餘程前から其希望が出て居つて、字引などを寫して居つた、恐らくはあの時にベルギーが日本に

のではないが、行つて見れば、何か事業をしなければならぬ、今まで自分の本國に於て永い間耕して來た土地を、繰返し／＼耕して居ると違つて、人間の足痕の這入つたことのない土を踏み、斧の聲の聞えたことのない森の中に這入つて、木を伐り地を耕し、所謂新なるものを掘り出すと云ふ活動が盛んになつて來た、此ことは人間の精神に非常な影響を與へたのである、吾々今まで同じ事をやつて來たものが、新な國に出て新な仕事を始める時には、如何なる愚物でも英氣が出る、活動の精神が出るものであります、開拓の事業と云ふものは、卑屈な人間をも勇猛にするものである、新な國に行つて新な事業を始めると云ふ氣風が人心を動かすやうになつては、どうしても今迄の如くに在來の氣風、在來の制度、在來の思想を其儘に守ると云ふことは出來ないのである、新大陸に於て新事業を始めるると云ふ精神は、どうしても何事も新なる方面に活動をしようと思ふ思想又實行を惹起して來るものであります、此に於てヨーロッパ諸國の中で、今までの

状態、或は現狀に満足しない者、思想の壓抑に苦しんで居つた者、政治上の自由を要求した者、さう云ふ人々は、相率ゐて新大陸に行つて、新天地を開かうとしたのです、此時の新大陸に行つた移民の英氣と云ふものは、今日の吾々から見て實に羨しいやうな感がありませぬ、彼等は手に一物を持たない、行先は如何なる國であるか唯話に聞かのみである、其所へ妻を携へ小さな子供を引連れて、さうして腕一本で自分の運命を開拓しやう、其場所に行つて志を同じうする者と共に社會を組織して、理想通りの新天地を開かう、思想の上に於ても制度の上に於ても、新天地を開かうと云ふ英氣を以て、其比の哀れな破れ船に乗つて、大西洋の波を蹴立て、出掛けた、其人の勇氣英氣と云ふものは、吾々は其通りにしないにしても、其英氣物々たる状態には、之に對して尊敬の情を表せざるを得ないと思ふ、兎に角斯の如くにして、新大陸の發見と云ふことは、有形無形の上に非常な影響を及ぼし、動搖を來し、人間をして總ての方面に於て新事業を始めやう

新方面を開拓しやうと云ふ努力を非常に發揮せしむるやうになつたのであります、此方面は先程申した如く先づ謂はゞ外部の事情であります、又内部の即ち精神的の方面に於ても同様の機運が動きたつたので、其最も大切なものは所謂文藝復興と宗教改革とであります

是も詳しく申上げるとは出来ませぬが、中世の文藝に於ては總て型が定まつて居つた、人が思想を言ひ現はさうとする場合には、其の言ひ現はす言葉も、言ひ方もさまつて居る、韻文を書けば韻文の形がさまつて居る、繪を書けば繪の式或は規則がある、斯う云ふ状態に於て永い間參つたのがそれで満足しないやうになつて、新たな方面に、自分の見るが儘の天地に接し、考ふる儘の藝術を作り出さうと云ふ活動が生じて來たのである、是れも勿論外部の刺激も加はりましたが、兎に角それが所謂文藝復興の運動となつて參つたのである、文藝復興と申しますと、今日所謂文藝と云つて居る小説を書いたり芝居をすることばかりのや

うに聞えませぬが、決してそれだけではなかつた、十六世紀の文藝復興と申しますのは、要するに人間思想の動搖であつたのである、それ故に此文藝復興の機運を擔つて立つた人の中には、色々の方面で研究を進めて居る人がある、先程新大陸の發見に就て、新たなものを發見する欲と云ふことを申しましたが、文藝復興も矢張り其の機運の一つであつた、それ故に其代表者とも謂ふべきリオナルド、ダビンチは、繪を畫き、彫刻も造り、又詩を作つて、立派な文藝家であつた、それと同時に哲學の方面にも新方面を開拓しやうとして居る、物理學の方面も、水力の研究をして、大きな仕事に應用しやうとして居る、又空中飛行機の研究をして其模型をすら造つた、或は又其頃の、今日物理學者として知られて居るガレリオが、僅かなこととあります、物が落ちる速力を實驗した如きは、矢張り新たな方面の研究であつた、それ迄の人間は物が落ちる時には其の重さに依つて早さが違ふものと極め込んで仕舞つて居つた、然るにガレリオは、それに疑ひを挿んで、さ

うしてピサの高い塔に登つて、自から實驗をやつた、是等は皆文藝復興の中に動いた人間精神の最も大切なものである

中世紀の思想は徳川時代と同様で、今まで斯う言つて居つたと云ふことを大切に、自分が信ずるとか自分が試して見たと云ふことよりも、人の意見、人の説を貴ぶ風が多い、今日でも田舎に行つて御覽になれば、矢張り其氣風が残つて居る、獨り學問のことだけに限らず、道徳上のことでも、少し知識の進み考へ進んだ人なれば、自分の行ひに就ては自分自らが道徳上の判断を下して進んで行く、然るに地方に行きますれば、斯う云ふことをすると悪い、何となれば外聞が惡いから、外聞と云ふことは人がいけないと言ふからと云ふことなんて、自分は惡いか善いか一々考へて見ないで、人が惡いと云ふことなら止して置かう、人が善いと言ふことならやつても宜いと云ふやうな氣風が多い、其氣風が今日でも地方には多い、是が日常のことであるから大して差支ないかも知れませぬ併し此處では勿論行かぬ、學問上の事に斯う云ふ考へ持つて居つたならば學問は少しも進み善くない、中世紀の學問は中々立派な點まで進んで居るのであります

轉教の記

三上白碧記

「張盛にはがみをなしてたゆむ心なけれ」之れ吾等の信行を奨励したる要諦である、唯かに吾等の心靈に無限の善きを與へて發憤の意氣を起さしむ、いやしくも佛子たるもの、その本来の自覺より立つて色慾的活動を離れずして已むべきでない、ことに物質文明の毒に中てられて國民思想の歸趨明かたむざるの時、護法愛國の熱情を突發して立正安國の大義を唱へ、依て以て天下の風教を興立するは吾等が畢生の事業である、徒らに因循の惰風を襲はれて力足らざるなど横着なる根性を起してはならぬ、「一文一句なりとも語らせ給ふべし」とは吾等に示されたる嚴訓ではないか、何れも病の振舞ありてならうものか、さらば「六月七日」予は今成日誓師と共に、北越の教田を開拓すべく午後十時上野發刊車の客となつた、沿道の夜聲何等見るべきものがない、「八日」午前五時長野に下車して朝餉をしたため、牛に引かれての有名な善光寺を見に往つた、市中は善光寺参りを客として衣食して居る、車夫が何か合圖したかと思ふと自ら兩腕にスラリと土産物の店がある、寺の石橋で車を降りると其男はこちらへと云ふ、ナルホド男は案内者であつた、けれども案内をうけて説明を聴くほど素人でもないから斷つた、男は采れた顔して見つめて居つた、さて油断のなからぬ物騒な世の中だ、限なく境内の俗化した處や、本堂内の風難なる顔や物などのあるのを僅かに十三分て視終りたが、虫も寂さないやうな頽れつた法衣を着た僧侶が蚊の泣くやうな聲で讀經して居る、聲に少しも力がない意氣がない、哀香念佛の本性を顯はして談入り相であつた、之も前掲の宗教に染はれて居る自然の影響だと思ふて何となく哀れにも感じた、「八時」の越後行に乗りて山又山、

「高田」

に着いたのは午前十一時、森川秀光師及信徒數名の出迎をうけ、腕車を借りて本堂に到る、本堂の拜殿には婦人信徒數名合掌唱題して予等を迎ふ、直ちに寶前に一乘の法味を捧げて正義の發揚と國運の隆昌に至願

「本化」

「行學の二道をはげみ候べし」との要諦を體して起りしもの、四はれたる教條的僻執なく、純乎公正の見地に立つて上人の人格を仰ぎ教義を實ひ、至誠行學をばげみて崇高なる品性を修養しつゝ居るのであるが、會員は何れも有爲の青年のみで、地方の中堅たるの實力を持つて居る、

から強き力ある團體の結合は、いまの處に於ては他に其れを求むるべきは甚だ少ない、「六月十五日」河合本なる新本無所本町高田久次氏別邸に於て講演を開いた、八十餘名の少女會員は宗教を棄てて美の信念を表明し、山名日宗師は今度思ひ切り玉へ以下の聖語を讀じ熱烈の誠意を喚び、更らに日蓮主義の實踐的法門を説いて國家及人生との關係に及び、日蓮主義の本領を論じて絶對の妙義を示された、予は現代思潮の病的傾向を痛論して靈格日蓮の活動主義に進み、之に依りて外科的根本治療を施し物心の生活を充實せしむべしと結びしが、二百の聽衆は身動きもせず四時間の講題を聽いて居つた、餘興として清榮氏の上人轉の浪花節や會員の時時などありて一段の清興を添へ、散會を告げたのは午後六時半であつた、さりとてこの妙行にかに功徳の大なることよ、行學會の諸氏が異体同心の實踐的信仰は、げに尊くもまた尊有ることである、この夜

「栃木」

「郵便」

に於て局員四十餘名のために精神講話を開いた、郵便事務は手や足を動かして少しも休まない非常な業柄なもので、根柢根性のものには出来なない仕事である、ことにこの通信機關は直接第三者相互の利益を關する仕事であるから、誠意を以て愉快に忠實勤かば分位の者隨的行動である、さればにや自己の思想に情風の起らぬやう、つねに心の胸に鞭を加へて訓練することが大事である、局長石塚氏がこの點に意を用へて局員を指導しつゝ居るのは、局員も栃木町民も其總てが幸福である、斯くありたいものだ、午後八時半、予は自己職務の成績は他の批評によりて定まるものでなく、自己の渾身の努力によりて光彩ある歴史を作るものなりとの理義を平易に説いて、「一生空しく過ごして高歳悔ゆる勿れ」の聖文を座右銘として之を傳へ、一時間の聖益を施して高田別邸に歸り、法悦の感にうたれたつて限りに就いた、明ければ十六日午前六時、正法興立の新講を捧げて佛祖の聖教を講ひ、朝餉の供養をうけて高田氏東部氏等と弘教上の感想など語り合ひ、幹部の諸氏はいかに元氣に充ちた風采にて詰めかけて来た、そうしてその挨拶は簡單ではあるが温情のこもつた何とも首へん權威と風味がある、予は貴氏に見送られて八時發の汽車に乗り、都に着いたのは正午十二時を過ぎる二十分、統一團の御寶前に拜跪して一賞の妙玉を唱へ、特に行學會員一同の健在を祝福して將來の發展を祈つた

勝越の天地は日蓮主義と深き因縁關係がある、ことに七里法華の實地は悉く本化の信念に在るべき筈ではあるが、過去における保護の力衰へて高生命を失へたの觀ありしも、今や時代の趨勢に促されて求道の熱を得るであらう、予はこの地に活信仰を養ふべき任務を負つて居るので、長生郡の一部を巡回して講演を開いた、六月廿五日午後二時豊田村小林大乗寺を會場とし、萩原市教師と共に現代青年の修業に就て日蓮主義の思想信仰を傳へ、精神生活の尊と理義を示して、處世の自覺を促がすものがあつた、「同日」午後八時半本館町中村政次郎氏宅に開演し、予は人生生活の意義より説き起して進境に處する用意を師へ、日蓮上人の生涯は進境なりと終始法悦に充ちたりと結び、萩原師は人生の價値は正義人道を確立するにありと論じて、信仰の無限力を傳へ、一道の靈光を發射するものがあつた、「廿六日」午後二時關村本法寺に開會、農繁期にて一般聽衆は少かりしも、高等小學生のために講話を試み、萩原師は上人の少年時代を語りて堅忍不殺の思想を鼓吹し、予は人の心は訓練の功を積まざれば、野生の虎馬と同じく、進むべき方向さへも分らぬことになるが故に、能く訓練して狂ひ廻らぬやうにすべしと論じ、日蓮主義の現未融合の教に由るべき所以を示して、少國民の廣に偉人格を印象せしむるに努めたので、多大の感化があつたことと信ずる、「同日」午後八時南白鹿村圓頓寺に開會、宮川光照師開會の辭に代へて信仰家の態度を教示し、予は各人は自己の職業に努力する所に眞價ありと説きて、懈怠の情性を試み、上人の活動主義を明かにしてこの信仰に全心を傾注すべしと結びしが、講演を聴くこと稀有なるこの地の人は、活ける日蓮主義の大精神に感乎して希望の光明に照されたるが如く、悦び勇んで其家庭に歸られたが、演説の人が二時間の講題に端座して執聴して居つたのは、眞に敬虔の念に充ちた行作と云はねばならぬ、されば教へて僅まざればその内在神性を開發して法悦の生活を送らしむることが出来るので信仰がない眼目だなど云ふて一職し去るのは、それは未だ自己の佛道的熱誠が足りないからであらう、若し夫れ至誠を以て教導の任に當らば必ず活信仰を興へることが容易であると信ずる

「廿九日」午後一時茂原町總館に開會、是より先き同志が周到なる準備

と遺憾なき廣告の賜は、定期前より数里の地より詰めかけ来り、場内何となく活氣を帯び、渡邊乾統師會を宜し、大川秋山師は宣教上の抱負に就て所感を發表し、予は現代人の病的思想の傾向を指摘して發奮努力を促し、日蓮上人の奮闘の一代の活潑史は、現代の各階級を通じて學ぶべき典型なりと論明し、進んで日蓮上人の信仰は活動の源泉にして努力の基礎なるが故に、この信仰によりて一身一家及び階級の福利と平和とを圖るべしと説き、關田榮太郎師は「日蓮主義大綱」と題し、愛國尊王の意義より説き起して上人の勤王主義に及び、日本建國の理想を實現するがために全力を傾注して大義名分を判定し、理路堂々として主權の存在を明確にせられたる上人の尊王主義を説示せられたので、聽衆の何れも安んずる日蓮主義の卓抜にその胸を清め、宇宙の一員として世に處する覺悟を與ふるものがあつたやうに思はれた、而して吾が道と思ふ同志は自己の財力を擲つて人心改善のために努力するので、自己の利害を外にしたる君子的態度であつて、其の仕事がいかに尊といか亦功徳が多いかは測り知られぬほどである、假しその所に集りたる人が紛ないにしても、善提の善根は永久に滅びるものではないのみか、刻一刻に佛性の光りが發現して來てあらうと信ずる、斯くして熱誠の一念、人の歸路を衝くものあらば活きた信仰を興へることが出来やう

予は五時二十分の閉會を告げてより、同志と將來の宣教に就て相語り、汽車の時間が来たので竹内普寧字津木玄英師及關謙寺現代人の見送りをうけ、六時二十分發に乗りて兩國驛に着いたのは九時であつた、途中關田道兄の自序に寄つて互に功徳を積みけるを喜び、歸來統一團の實前に拜禮して妙行を奉告し、度々如説修行抄を拜讀して不退轉の道念を固めて、微力を擲つてこの大法宣傳のために働き得るを感謝分掌し、依て以てこの轉教の肥を移る

轉教日誌

原田日勇記

捨ける人生に活生命を興へて日蓮主義の靈氣に感奮せしむるがため吾人の全力を傾注するは尤も快事とする所なりと予は今回能仁堂正の鳥取

きぬ同日午後三時半鳥取驛に着法泉寺住持松橋師天晴會員及加宮君の歡迎を受け午後二時同市西町の圖書館樓上に於て予は「日本國の理想と大主義」能仁師は「現代人の病狀」として「日蓮聖人」に於て廣長舌を振へり因に同會は田中陸軍大佐、小倉少佐等の發起にして其の會員は鳥取市に於ける知名の紳士にして將來日蓮主義發展上最も有力なる會なる事を認む「九日」午後二時大根町田中大佐の自宅に於て能仁師は「美の修養」隊長等知名の貴婦人令嬢多く予は「佛陀と婦人」能仁師は「佛陀と婦人」に於て現代婦人の任務の重きを自覺すべきを最も平易適切に講話せられたれば多大の感動を喚び田中大佐の町重なる晩餐會を享け同日八時立川町法泉寺に於て予の宗教の探源「能仁師の「國體擁護之宗教」を論じて日蓮主義の光明を發揮せり」十日「松橋師、田中大佐、小倉少佐等の見送りを受け鳥取驛を渡り關田師一行の歡迎ありて本立寺に着午後八時「日蓮主義とは何ぞや(其一)」能仁師、予は宗教信仰の欲求(其一)、「現代人の要求する宗教に就て」能仁師の講演あり「十一日」午前市橋家に至り法要を督み餐の供養をうけ午後二時本立寺にて「日蓮主義とは何ぞや(其二)」能仁師、予は「宗教信仰の欲求(其二)」、能仁師の「敬神觀念と信仰の意義」の講演あり市橋家一社倉吉地方より熱誠なる人々の集れるありて教益多からざるを認めたり「十二日」午前八時半松橋驛を發し松橋野老信正吉永師及び信徒多数の歡迎を受けて妙立寺に着午後八時講演「開會之辭」野老信正、予は「日蓮聖人の理想」「三教體現の偉人」能仁師の講演あり聽衆滿堂「十三日」午前八時第十師團内務治部に於て隊長堤少佐の教誨を辭して本心と反省「能仁師の講演あり夜八時妙善寺に於て吉永師「開會之辭」を述べ「本心と反省」と靈界、能仁師の「信仰意識の調整」に就て講演ありしが聽衆頗る多数にして皆等しく法雨に浴しぬ「十四日」野老信正吉永師其外多数信徒に見送られ午前九時十分明石へ向け出發關東寺に到る都合上開演の運びに至らざるも佳職内藤師代樂師寺氏等と協定條件ありたり「十五日」午前、時半明石登十時兵庫驛着上田師外信徒多数の閉會を受け市橋所に入り夜開土田智達師が開會の辭に次て予は「正義觀念」、能仁師は「能仁なる宗教心の養成」に就て熱誠なる講演を試み類々盛況を経由來鳥取兵庫の地其信仰熱誠にして色澤の妙行に實に道教日蓮儀かに一周日なりし其化益の多かりしことを認め處て各地の熱誠なる信徒者の影響に及ぼすことを期す

統一團翼賛員芳名錄(第七回)

- 山梨縣南巨摩郡增川村 (贊助) 深澤庄五郎
- 本所區龜戸町 (甲特) 岩戸清治郎
- 淺草區永住町九六 (乙通) 戸水萬項
- 本郷區西片町十宮川方 (乙通) 井内徳三郎
- 淺草區馬道町八ノ九住江方 (贊助) 伊藤コキク
- 淺草區永住町九六 (贊助) 野口夏江
- 神奈川縣鎌倉郡飯田 (甲通) 萩原啓門

翼賛員寄附金領收報告(六月一日迄)

- 一金參圓也 大正二、三—三、二 岩澤鏡子殿
- 一金壹圓也 大正二、六—三、三 深澤庄五郎殿
- 一金五拾錢 大正二、六、七 戸水萬項殿
- 一金貳拾五錢 大正二、六 井内徳三郎殿
- 一金六拾錢 大正二、六—十一 伊藤コキク殿
- 一金壹圓也 大正二、六—三、三 野口夏江殿
- 一金壹圓也 大正二、五 吉田芳緒殿

- 一金壹圓也 大正二、四、五 鈴木日雄殿
- 一金五拾錢同 鈴木もと殿
- 一金貳圓五拾錢 大正二、二—六 池部儀吉殿
- 一金壹圓五拾錢 大正二、一—三 加藤八太郎殿
- 一金參拾錢 大正二、四、五、六 渡邊源治郎殿
- 一金參拾錢同 渡邊壯一郎殿
- 一金五拾錢 大正二、四—八 齊藤藤四郎殿
- 一金拾錢 大正二、六 諸井竹次郎殿
- 一金拾錢同 諸井みき殿
- 一金貳圓也 大正三、三—六 諸井きく殿
- 一金四拾錢同 三上義徹殿
- 一金壹圓也 大正二、三—二 三上禎子殿
- 一金貳圓五拾錢 大正二、二—六 國見増藏殿
- 一金壹圓五拾錢 大正二、二—六 豊田良正殿
- 一金壹圓五拾錢 清水なを殿
- 一金六圓也 品川正法護持會殿
- 一金壹圓也 大正二、七、八 萩原啓門殿



### 活動史



#### 東京

人は煩悩の熱に浮かされて活き  
 少ない無理もないことであるが此風潮が激流  
 となりて人の歩みつつ居る足とさうやうの  
 ことがあつたら容易ならぬことである何とし  
 ても熱を冷ました上に浮足の調子を改めさせ  
 なければならぬ吾等の苦心する所はそこだ全  
 分の力を傾けてこの人のために働かねばなら  
 ぬ

▲六月八日講演家藤師は上人活動の意氣を論  
 して奮起を促し野口師は一國の風教を立つ  
 べき所以を説いて日蓮主義の國家觀に及ぶ本  
 多大僧正は法を護る心と耐忍の力を示して日  
 蓮主義の活精神を述べられたので一種の強き  
 力を與ふるものがあつた

▲十五日午後一時半鐘井師は儒教の本質と日  
 蓮主義に就て論明し山根師は護念の意義より  
 信念受持の行門を説き本多大僧正は日蓮主義  
 の社會活動の源泉を述べて上人の意氣に感奮  
 すべしと結び處世の針路を示すものがあつた

▲二十二日午後一時地明會の主催にて開會三  
 上師は佐渡巡拜所感を述べ開田師は人生上生  
 死の大事を閉却するの愚を試めこの教に由り  
 て生死の險道を超ゆべしと論じ佐藤海軍少將

#### 品川

は本誌に掲載したる講演を試み大に女性の反  
 省を促し本多大僧正は法華信仰の大力を  
 論じて思想の根柢に活力を與へ深き印象を刻  
 みて一道の光明を發射するものがあつた

▲六月八日午後八時小石原町大道會にては  
 富田師の所説に次ぐ佐川師の勸信上に關する  
 熱烈なる轉法輪があつた

▲淺草區内の親善會知見會開明會四恩教林何  
 れも例會を開き思想上の訓練を與へ効果紛  
 からざるものありと云ふ

六月十二日午後二時妙國寺にて然  
 て正法護持會主催の講演あり山  
 根布教師、國寶、國友布教師、倫理の大本、本多  
 大僧正、道念、各講師が熱烈なる講演は聴衆の  
 信仰をして増進するものありたり「六月十五  
 日」午後一時より妙蓮寺に於て養徳兒童會の  
 催あり浅尾清藏君、田舎の兒童の兒童、菊田  
 宣暢君、新開實の孝子、佐川主幹の「改徳」等の  
 講話に忠實義士の講義ありて頗る感化なりし  
 「六月二十日」夜妙蓮寺に交親會を開く浅尾清  
 藏君、道、佐川布教師、以慈修身に就て向上の  
 指針を解説せられ開田南龍老の「日蓮上人立  
 宗の巻」の講演あり本會は信心心二法成辨  
 の道程に大に注意を拂ひつゝあり「六月二十  
 七日」午後二時より本光寺にて經王會の講演あ  
 り富田良進師「心途醒悟」佐藤重賢師「二行一  
 切行」佐川布教師「新説の眞意」各講師が誠  
 心をこめた提唱は演説台開解の志願を満足  
 したり其他「六月十一日」夜大森町第三回教義  
 顯揚會同「十六日」夜高木氏同「十八日」夜大井  
 町細井氏同「二十五日」夜中田氏各家布教に

#### 東海道

豊橋市妙國寺にては七月一日よ  
 り天下の名士を聘して國民思想  
 講演會を開き地方人心の修養に供するものあ  
 りと云ふ本多大僧正は講師として出演せられ  
 た

▲橋香會——東洋大學が元智學館と稱したる  
 時代に在學中の本化門下各教團の學生が寄り  
 て組織したるものにして信仰の復活と各教團  
 の融合を絶叫して大に宗の内外に渡りて影響  
 を及ぼし來れることは己に世の讀る所なりと  
 す然るに今更に發展策として例月一二回の  
 公開演説道路布教を舉行することに決し會員  
 は大に意氣込み居れり而して其の發會は六月  
 八日統一閣に於て開演し「生活と信仰」森川博  
 祐「法華經より見たる新らしき女」岡村本幹、  
 「佛立主義」伊達清敏、「代時と日蓮」野口日主  
 師にして現代の缺陷を救ふには日蓮主義なら  
 ざるべからざる理を明かにせられ多大の感  
 奮を與へたりと云ふ

#### 京都

六月一日午後妙蓮寺に國語會を  
 行ひ石井師は近來の宗教が迎合  
 主義に流れて宗教の生輝を失ひつゝあるの傾  
 向を慨し本誌を論じて信仰の正邪を明にせら  
 れたるが故に活生命を興ふるものありたり、  
 「十三日」午後報恩及び法話會を開き銀井能升  
 師は日什師の遺訓に對り信仰の要領を説き本  
 師の大慈悲に接觸するの大切な事を示され  
 たり「十五日」千本五辻善堂寺に於て演説會を

開く銀井能升師は理想の高き教こそ眞に低き  
 人生の實地を教ふに過ぎる所以を文筆を引  
 續して日蓮主義の特長を説き石井宣俊師は報  
 恩の意義及び佛敎の實際面を詳説し川崎英照  
 師は槍を著たる兵者は多けれども戦に懼をな  
 さざるは妙きが如しとの聖文を引ひて近代の  
 信仰が形式に流れ輕薄に傾きつゝあるを慨し  
 聖實の信仰を呼びて十時散會せり「十八日」午  
 後八時妙蓮寺講堂に開會石井師は日蓮聖人に  
 は幾多の特長あり其愛國の念の強かりし事  
 は實に獨特の感ありと其理想及び事實を詳  
 説せり銀井能升師は法華信仰は行淺にして而  
 も其功や深しとて巧妙の例證を引ひて説く處  
 甚だ親切なり川崎英照師は水は能く船を浮べ  
 るも水能く船を覆えすが如く五教は人を養ひ  
 又能く人を損するが如く佛法も是を誤つて用  
 ひ入か途に佛法の爲めに亂さるべしと尤も巧  
 妙に熱心に日蓮主義の眞體を發揮して多大の  
 感奮を興えたり「廿八日」午後法話會を開く川  
 崎英照師實者宮崎虎之助の信仰を詳説して  
 日蓮主義が總べての點に於て特長を有せる事  
 を詳論して純善の信仰を説くこの道と修行  
 とによりて人たるの眞價を開發すべきを説示  
 し大に調化を布きたりと云ふ

#### 堺

六月廿一日堺妙蓮寺に講演會を  
 開く高木本報師聖文を率領し我  
 宗の正義を述べて信仰の喚起を奉賛し我  
 師は信仰を要求する人は須らく其本尊を擁護  
 して其信を定めよと説き堅實なる信仰にのぼ  
 るべしと論じ多大の印象を興へたりと云ふ因  
 に毎月廿日夜講演會を周き廿一日夜は特志の

#### 福井

六月十六日午後七時福井市妙經  
 寺に於て地明會第十回例會を開  
 催す寶前に法珠を捧げて現當の調化の指示を  
 田聖道師は人格修養上に關する聖訓の講示を  
 講じて妙蓮の本義を論究せられたるが故日蓮  
 主義の光明に接して調化の多大なるものあり  
 といふ

#### 大阪

大阪市南區生玉寺町堂開寺にて  
 は今般住職高木本報師入寺以來  
 布教に努力することとなり第一着手として毎  
 月十二日夜宗祖の報恩會を兼ねて同寺本堂に  
 公會演説を催はすこととし「六月十二日」夜そ  
 の初會を開けり信徒石村堅四郎氏等幹旋し廣  
 告に會場にするの設備を整へたり、先づ  
 鷺田正沙彌開會の辭を述べ次で高木師は  
 「日蓮上人の真恩」と題して知恩報恩の趣旨を  
 説き蓮成寺の堀本日蓮師は「佛敎の統一主義」  
 と題して諸宗教の分裂を難し法華經主義に統  
 一すべきことを述べ午後六時開會「同月二十  
 二日」午後一時より東區西高津中寺町蓮成寺  
 に於て開祖日什大正義師法華開紀念會を開會  
 二時より演説會を催す是亦前記の諸師等出席  
 して日蓮主義の鼓吹に努めたり

#### 千葉

下總の地には日蓮主義者が少な  
 い夫れは或て居るの不動と云ふ後日  
 佛敎が全盛を占めて居るのて他は之に厭れせ  
 られて居るの觀があるさきりながら人心の發奮  
 にはこの緣日佛敎によりて満足の出來ない點  
 があるどうしても活きた靈力を求めて平安を  
 得やうとするのは人生必然の情懷であるがこ  
 の欲求に應ずるものには即ち日蓮主義を指しては  
 他に求め得られないのである故に一たびこの  
 大法の靈力を嘗てば湯せる人心を潤ふことが  
 出来る「六月廿七日」印傳師日井町妙蓮寺に  
 講話を開き夏目秋原布教師の懇切なる勸信談  
 ありて信仰の大事なるを示し同日午後佐佐倉町  
 妙經寺に於て開演田邊慎一師開會を宣し夏目  
 秋原師の處世の要義と法悦の生活を傳へ  
 て宗教的信仰の意義を説いたので聴衆は昔年  
 の夢醒めたるものありしと云ふ「廿八日」午前  
 宗吾神社の講堂に當る大發大經寺に講話を開  
 いて日蓮上人の模範人格なる所以を紹介し同  
 日午後酒々井町經風寺に於て明治天皇奉悼會  
 を行ひ次で講壇を設けて田邊慎一師開會を宣  
 し夏目秋原師の熱烈なる講説ありて日蓮主  
 義の純正信仰を勤め百餘の聴衆あたりて感に入  
 るもの多かつた「廿九日」八街村霞戸新設寺に開  
 く田邊夏目秋原師の修養上の教訓及信仰の力  
 に就て詳説せられたるのて深き印象を興へて信  
 仰の一念を發起せしむるものありしと云ふ何  
 がさて聴く人は一時に燃え立つほどに思ふて  
 も忘るゝ事ありては何の役に立たぬこの一席  
 の講演によりて得たる信仰は永久に滅びざる  
 やう之を培ふて芽を出さねばならぬ蓋し熱烈





